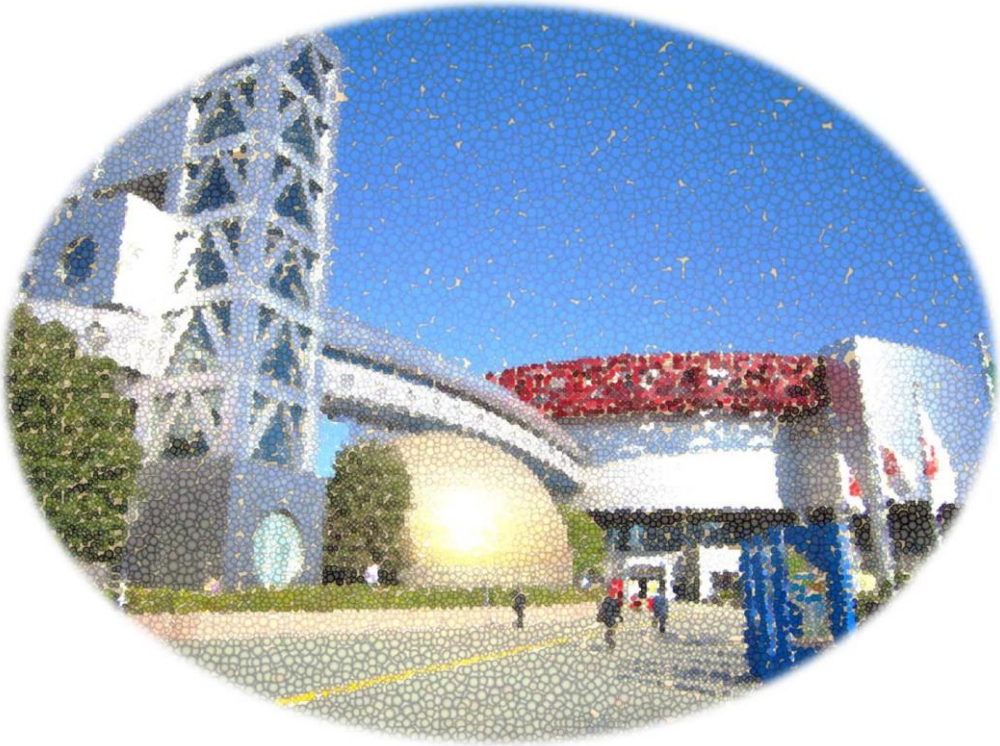
平成 28 年度

英語教育アドヴァンスト研修

授業改善プロジェクト 報告書

ーアクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践ー



神奈川県立国際言語文化アカデミア

はじめに

神奈川県立国際言語文化アカデミア 所長
三國　隆志

アカデミアは英語教員に良質な研修を行っていると自負している。しかし，英語教授法の多様な理論の研究や実践，その効果測定に英語教員は忙しい。忙しさのため教員は疲労困憊して教室で笑顔を忘れることもあるだろう。生徒たちが自分では担えないほどの個人的な苦悩で喘いでいる存在であることを忘れてしまうこともあるだろう。外国語を学ぶ目的がエリート主義の価値体系に取り込まれて固定され，初めて学ぶ外国語を前に躍動する喜びを感じることが無くなる危険はいつもある。アカデミアの研修は勉学の固定を砕き喜びを再興することを目的としている。日本において外国語学習が生徒の生きる喜びに結びつくためにはどれほどの時間がかかるのか。まだ成熟のための時間が必要だ。

1889 年から 1914 年の間に，東欧からアメリカ合衆国に移民したユダヤ人総数は約 153 万人である。旧世界の貧困や差別や虐殺から逃れるため移民を決断し，ユダヤ人同士の日常語であったイデッシュ語とはまったく異なる英語の世界に入っていった。ユダヤ人は出稼ぎの民ではない。アメリカで成功するには立派なアメリカ人になる意志があった。それを装う効果的な手段が幾つかあった。ヘブライ語の自分の名前をアングロ・サクソン風の英語の名前に変えた。ハシディームは長い顎鬚を剃り落とした。シナゴーグ礼拝に通わなくなった。コシャーを捨てた。安息日に働いた。ついにはキリスト教に改宗した。服装も東欧風の服装から標準的アメリカ人の背広，コート，山高帽になった。眼鏡をかけた。眼鏡はアメリカでは教養階級に属する人間がかけるものであったから。金鎖つきの金時計の取得は絶対に必要であった。「時は金なり」の意識を身につけた。いざという時には質草になる。

では英語はどうしたのか。イデッシュ語風のアクセントと表現が抜けない奇妙奇天烈な英語がこの時代に話された。当時のユダヤ人家庭では家族は同じ食卓を囲みながら，旧世界から来た父母たちはイデッシュ語新聞を読み，子供たちはマルクスの「資本論」を読み，下宿人たちはスピノザやシェイクスピアのロシア語訳を読んでいた。やがてアメリカ生まれの子供たちは両親が話すイデッシュ語なまりの英語を攻撃しはじめた。恐らく三世代以上をかけて標準的アメリカ人が出現した。アメリカ英語が滑らかに口から出る世代が登場してくる瞬間であり旧世界の「シュテートル」文化が失われていく瞬間である。ヘブライ語もイデッシュ語も理解できない世代が登場する。アメリカ人になれても，数千年をかけて醸成された民族固有の文化や宗教が失われては意味がない。これに気づいたユダヤ人たちは自分たちの大学を創設していく。いまの日本で生徒が英語を学ぶ目的は英語が使えなければ，国家が将来的に外交，経済，学問の領域で新興国に後れを取るからであろう。日本語が内包する伝統文化の上に立って英語を教える仕事が教員の課題になるだろう。語学の教員は広く内外の教養を積まねばならない。通弁の英語の時代は終わった。「英語は実に面白いぞ！」と教員が真摯に生徒に伝えれば，生徒には教員の人格も伝わる。胸を張って進もう。

目　　次

「英語教育アドヴァンスト研修」とは　1
「教師が変わり，生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト　3

「聞くこと」にかかわる指導

達成感とスキルの向上を目指したリスニングの指導　5

「話すこと」にかかわる指導

会話力を高めるスピーキングの継続的指導　9
オーラルサマリーを中心にした授業デザインの工夫　13
自信と意欲を高めるスピーキング指導　17
話すことへの抵抗感を減らすスピーキング指導　21

「読むこと」にかかわる指導

主体的な読解を促すリーディング指導　25
読解ストラテジーの指導とポストリーディング活動の工夫　29
意欲と自信を高めるリーディング活動　33
予習を前提としない、リーディングスキルを育成する授業　37
主体的な学びによる読解力の向上を目指した授業　41
日本語訳に頼らない英文読解の指導　45
速読即解を目指したリーディング指導　49
スキルを育てるプレリーディング活動と読解タスクの工夫　53

「書くこと」にかかわる指導

段階的サマリーライティングの指導　57
ディベートを活用したパラグラフライティングの指導　61

＊それぞれの実践レポートの内容については，言語活動の呼称などに関し，厳密な用語の統一はしていません。

英語教育アドヴァンスト研修とは

○ 英語教育アドヴァンスト研修のねらい

英語教育アドヴァンスト研修は，神奈川県で中核的役割を担う高等学校英語科の先生方に専門性の高い研修の機会を提供することを目指し，県教育委員会との連携のもと，国際言語文化アカデミアで平成23年度から開講されました。

集合研修9日（前期2日，夏季4日，後期3日），勤務校での授業研究1日（前期・後期各半日，研修スタッフ訪問）から構成される合計10日間のプログラムは，「英語教師の専門知識，英語による発信力」「授業研究，授業改善」「多文化共生，異文化コミュニケーション」を3つの大きな柱としています。

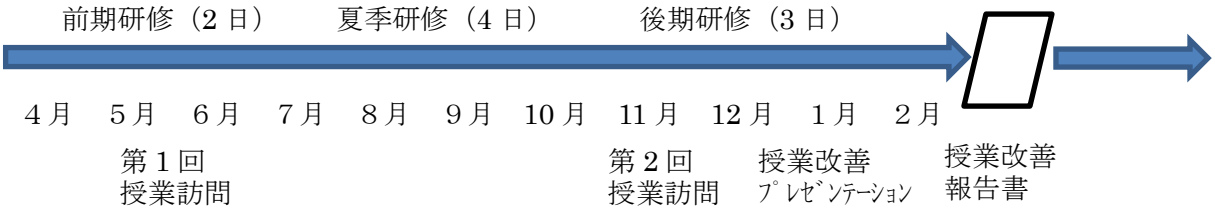
Objective 1	Objective 2	Objective 3
Expertise in English	Reflective Teaching	Multicultural Awareness
英語による発信力，および英語教育・言語習得理論の実践への活用力を磨く。	自らの授業を客観的に分析し，他教員の実践からも学びながら改善へと結びつける省察力を磨く。	英語教育において多文化共生，異文化ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝを扱うことの意義について意識を高める。

平成28年度までの6年間で，計112名の参加者が，高度な言語知識・技能およびそれらを基盤とした指導力を身につけ，仲間の教員との共同による英語教育推進に貢献すべく県内の各学校で活躍しています。

毎年プログラム内容に修正を加えながら，英語運用能力向上の試みをはじめ，省察による授業実践力向上，多文化共生・異文化コミュニケーションへの意識高揚など，研修内容の改善と充実に取り組んできました。

○ 研修成果を活かす場としての授業改善プロジェクト

研修内容は教室でのよりよい授業実践，生徒の英語力向上へと結びつかなければなりません。しかし，教師であれば授業改善の複雑さ・難しさは身をもって経験しています。そこでアドヴァンスト研修では，集合研修において多文化共生への意識，英語力，英語教育に関する専門知識を高めながら，勤務校では継続的に授業改善に取り組むことができるように授業改善プロジェクトを取り入れています。



○ 生徒の伸びを実感するための評価を目指す

外国語の習得には長い年月と地道な努力を必要とします。外国語を教える技術の上達にも長い年月と地道な努力を必要とします。英語教師は日常の生徒指導に加え，自らの英語力の増進と指導技術の上達を同時に行わねばならないので大変ですが，指導の結果，生徒の英語力が高まったと実感できると大きな励みになります。生徒にとっても英語力の伸びを実感することは自己効力感や学習意欲の高まりにつながります。英語力を短期間で劇的に上達させる魔法の指導法にはなかなか巡り会えませんが，一定期間の指導で生徒の英語力の重要な側面を上達させることは可能です。そうした変化を教師と生徒が実感し合い，その積み重ねを通して総合的英語力を育てることが重要だと考えます。

報告書の「生徒の変化」の記述には，研修参加者が，自らの指導の結果として生徒の英語力をどう評価するかについて，その努力のあとが読み取れます。

- まとまった内容を聞き取る力を評価するための外部試験問題（英検等）の活用
- 日常的な話題について話す活動の成果（流暢さ）を評価するための１分間の発話語数の測定
- 事物の説明を口頭で行う活動の成果（音量音質，理解し易さ，アイコンタクト）を評価するためのルーブリックの活用
- 初見の英文を読み要点や論展開を理解する力を評価するためのセンター試験問題の活用
- リーディング指導の習熟度別の効果を評価するための，習熟度別正答数変化傾向の分析
- ライティング指導の効果を分析的（内容・文法）に評価するためのルーブリックの活用

英語力の伸びを実感できる評価・指導方法を工夫すること，適切な目標設定，段階的指導と，その成果を敏感に評価できる方法を考案することが，教師と生徒が充実感を持って学び合う鍵だと考えます。

○ 報告書作成の目的

本報告書の目的は３つあります。第一に，研修参加者が自らの授業改善の軌跡を記述しお互いの情報を共有することで今後の授業改善のための共同体づくりに役立てること。第二に，報告書の内容を他の英語科教員と共有することで，授業改善に関するアイディア創出に資すること。第三に，高等学校英語教育の課題やそれに対する現場の取組状況を公表することで，英語教育や教師教育にかかわる研究者の今後の研究に資することです。

お読みになる際は，以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し，生徒はみなそれぞれの可能性を持っているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について，読者に参考となる情報を個人情報の保護に留意して記述する。
3. 実践報告については，理想論にとらわれず，現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者にわかるように記述する。
5. データ処理や分析については，統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れる努力をする。

本研修の実施および本報告書の作成にあたっては，過去の文献や研究成果，私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

「教師が変わり，生徒が変わる授業」を目指してー授業改善プロジェクト

○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

１．自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果，活動のつながりをあらためて考えることで，英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより，自分の授業を客観的に分析するということを体験します。

２．授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて，どのような課題・問題があるか，教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを，思いつく限り挙げてみます。

（例）英文読解に終始してしまい生徒に自己表現をさせていない。

音読をしっかりとさせたいが声も小さくなかなか盛り上がらない。

３．改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち，改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

４．生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを，質的・数量的に調査します。

（質的データの例）生徒の英語学習に関するコメント，教師による学習観察記録

（数量的データの例）標準テストの得点，推定語彙サイズ，発話語数

５．改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを，「リサーチ・クエスチョン」および「改善の目安（数値目標）」として明確に言語化します。

６．目標達成のための手だての決定

目標を達成するために，授業でどのような指導を行うかを決めます。その際，それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

（例）新出語彙の導入に画像や映像を活用すれば，記憶の助けになり語彙の定着がしやすくなるだろう。

７．生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で，生徒の変化・向上を検証し，改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に，この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて，教師自身がどのように変化したかを省察します。

８．報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換，勤務校や地区での情報提供に役立てるために，レポートを作成します。ここで再度，今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに，今後の課題について考察します（研修最終日に英語による口頭発表も行います）。

○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では，うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさはありますが，生徒の質的・数量的ニーズを調べ，その客観的データに基づいて，生徒とゴールを共有しながら（変化をともなう）意思決定をしていくという意識やスキルは，プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が，仲間を増やしながら，よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

○ これまでの 6 年間のテーマ分類

この 6 年間で受講者の先生方が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると，次の表のようになります。26 年度までは，「動機づけ・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが，27 年度からは，「『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標」に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し，4 技能のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	23 年度	24 年度	25 年度	26 年度	27 年度	28 年度
聞くこと	0	1	0	0	1	1
話すこと	2	1	2	7	9	4
読むこと	5	4	*1 4	*1 6	11	8
書くこと	4	4	3	3	4	2
動機づけ・学習意欲	6	3	1	5	－	－
語彙・文法	3	1	2	3	－	－
計	20	14	13	25	25	15

*1：「技能統合型」

達成感とスキルの向上を目指した日々のリスニング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 3 クラス，合計 65 名（男子 32 名，女子 33 名）の生徒である。どのクラスの生徒もペアワークやグループワークなどの活動への取組は意欲的である。しかし，意欲的な取組が定期テストの結果に結びつかず意欲を失っている生徒もいる。約 6 割の生徒が，大学，短大，専門学校への進学を希望している一方で，未定の生徒が 3 割ほどいる。

解決すべき課題

多くの生徒が，将来英語が必要で話せるようになりたいと感じている。英語でコミュニケーションを取るために相手が話していることを聞き取れるようになってほしいが，中学校レベルの語彙や文法の知識が定着しておらず，また英語の発音やスピードに慣れていないため，聞き取れた少ない単語だけで理解しようとする結果，正確な内容理解ができないことが多い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第 1 回英検 3 級リスニングテスト（7 月実施：受験者数 65）

簡単な英語で話されるまとまりのある文章を聞いて，内容を的確に聞き取る力がどれくらい身についているのかを調べるために，英検 3 級のリスニング問題（大問 3）10 問を出題した。1 問 1 点とした平均点は 5.9 点で，英検合格の目安となる 6 割以上正解した生徒は 28 人で全体の 43%だった。

受験者数	平均点	最高点	最低点	6 割以上正解
65 人	5.9 点	9 点	1 点	28 人(43%)

・アンケート調査（7 月実施：回答者数 65 名）

1．あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
8 人(12%)	24 人(37%)	18 人(28%)	15 人(23%)

2．英語は将来必要だと思いますか。

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
34 人(52%)	25 人(38%)	3 人(5%)	3 人(5%)

3．あなたは授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。(3 つまで解答可)

読む力	書く力	話す力	聞く力	単語や熟語の知識	文法の知識
20 人(31%)	17 人(26%)	55 人(85%)	43 人(66%)	8 人(12%)	18 人(28%)

４．あなたは英語を話す力は必要だと思いますか。

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
41 人(63%)	20 人(31%)	3 人(5%)	1 人(2%)

５．あなたは英語を話すためには，聞く力は必要だと思いますか。

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
47 人(72%)	18 人(28%)	0 人(0%)	0 人(0%)

半数の生徒が，英語が嫌いと感じている一方で，大半の生徒が，英語は将来必要であると感じていることがわかった。さらに，多くの生徒が，話す力，聞く力を授業で伸ばしたいと感じており，ほとんどすべての生徒がそれらのスキルの必要性を認識していることもわかった。

リサーチ・クエスチョン

簡単な英語で話されているまとまりのある英文を聞いて，内容を的確に聞き取る力を身につけさせ，リスニング力の向上を実感させるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：

・英検３級のリスニング問題（第３部）で，6 割以上正解できる生徒が全体の 6 割以上になる。

・アンケートで「聞く力が伸びた」あるいは「聞き取れている」と実感できる生徒が全体の 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ まとまりのある英文のリスニング活動を継続的に行えば，概要を聞き取ることに慣れ，自信も高まるだろう。

・プレリーディング活動として教科書英文の概要把握を目的としたリスニング活動を行う。

・授業最初の 5 分間でリスニング問題集によるリスニング活動を行う。

○ 発音や音のつながり，区切りを明示的に指導すれば，聞いた英語をより速く認識できるようになるだろう。

・CD の音声にならい，意味のまとまりに注意させた音読活動を行う。

・発音に注意させながら，ディクテーション，シャドーイングなどのリスニング練習を行う。

○ 基本的な語彙や表現，語順をくり返し指導すれば，より的確な聴解に役立つ言語知識が身につくだろう。

・ペアワーク等の活動を通じて語彙の定着を図る。

・基礎的な文構造の定着を図るために，語順整序の練習を行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回英検３級リスニングテスト（１２月実施：受験者数 65）

再度，７月と同様のテストを行い，それぞれの結果を比較した。

	受験者数	平均点	最高点	最低点	6 割以上正解
第１回	65 人	5.9 点	9 点	1 点	28 人(43%)
第２回	65 人	5.9 点	9 点	1 点	19 人(29%)

平均点は同じだったが，6 割以上の正解者が 10%以上減ってしまい，目標を達成することができなかった。その要因として，生徒の語彙･文法知識がまだ不足していたこと，リスニング問題集による活動を継続的に行うことができなかったため，問題形式に慣れていなかったこと，期末試験直後の実施で気が抜けてしまっていた生徒が多かったことなどが挙げられる。

・アンケート調査（１２月実施：回答者数 65）

１．これまでの授業を通して，あなたは聞く力が伸びたと思いますか。

伸びた	どちらかといえば伸びた	以前と変わらず聞き取れる	どちらかといえば伸びなかった	伸びなかった	以前と変わらず聞き取れない
2 人(3%)	36 人(55%)	8 人(12%)	4 人(6%)	5 人(8%)	10 人(15%)

聞く力が「(どちらかといえば）伸びた」「以前と変わらず聞き取れている」と感じる生徒の割合は 70%になり，改善の目標値に達した。各レッスンのパートごとに，概要把握のリスニング活動の継続的実施が，聞く力の伸びを実感させることに，一定の効果があったといえるだろう。

２．今後もリスニングによる本文理解の活動をしたいですか。

したい	どちらかといえばしたい	どちらかといえばしたくない	したくない
13 人(20%)	31 人(48%)	19 人(29%)	2 人(3%)

３．リスニングによる本文理解でどれくらい理解できるようになりましたか。

最初のリスニングでだいたい理解できる	単語の確認後ならだいたい理解できる	本文を見ながらならだいたい理解できる	まったく理解できない
0 人（0%）	36 人（55%）	20 人（31%）	9 人（14%）

４．リスニングによる本文理解の活動をしてみて何が難しかったですか。（３つまで解答可）

単語	文法・語法	発音	話すスピード	音のつながり	聞き取るポイント
14 人(10%)	42 人(30%)	19 人(13%)	22 人(15%)	18 人(13%)	27 人(19%)

これまでの授業では，英文の内容理解を読解のみで行ってきたが，今回読解に先立ってリスニングでの内容理解活動を導入した結果，7 割近くの生徒が今後もしたいと答えた一方で，毎回同じパターンのため飽きてしまうという意見もあった。今後は，飽きさせないために，リスニング活動のバリエーションをさらに増やし，聞き取りのポイントを厳選することやそれぞれのリスニング活動の目標を明確にすることなど改善すべき課題が見えてきた。また，リスニングによる本文理解については，「単語の確認後なら大体理解できる」という意見，リスニングによる本文理解の活動のなかで難しかったことについては，「文法･語法」という意見が多かった点から，語彙や文法については今後もくり返し指導していく必要がある。

・生徒が積極的に取り組むための授業改善

今回の授業改善プロジェクトでは，リスニングスキルを伸ばすための指導を行ってきた。またその一方で，半数の生徒が，英語に苦手意識を感じていることを踏まえて，ペアワークやグループワークを取り入れて積極的に授業に取り組むための工夫もしてきた。その結果，「以前よりも英語の学習に積極的に取り組めるようになった」という生徒の割合は全体の 80%，「今後もペアワークやグループワークを取り入れた活動をしたい」という生徒は 72%，「今後も生徒が主体的に学ぶ授業が受けたい」という生徒は 70%になり，この取組によって多くの生徒の授業に対する意欲を高めることができたといえるだろう

教師の変化

・目標を明確に設定することで，目標達成のために授業をどのように展開し，生徒にとってどのような活動がより効果的なのかを考えて授業を設計するようになった。
・今まで行っていた音読活動やペアワーク，グループワークについて，目標や目的を明示することで，生徒の学習意欲を高めることができた。
・授業改善のテーマにもとづいたアンケートを取ることで，生徒が何を考え，何をしたいのかを把握したうえで授業改善を行うことができた。
・生徒が授業に主体的に取り組み，知識や技能の定着を図るためにはどのようにすればよいのかを日頃から考えるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

「英検３級のリスニング問題（第３部）で，6 割以上正解できる生徒が全体の 6 割以上になる」という今回の授業改善の目標は達成することができなかった。その要因として，生徒の語彙･文法知識の不足，帯活動でのリスニング問題集による練習の不足などが挙げられる。聞く力が伸びたと感じる生徒は増えてきているので，これを足掛かりに，さらに効果的にペアワークやグループワークを取り入れて，4 技能のスキルアップやそれを支える言語知識の定着につなげていきたい。

まとめ・感想

今回この研修に参加させていただき，今までやっていた自分の授業を根本から見直すことができた。リスニングによる本文の概要把握やリスニングスキル向上を目指した活動を取り入れるといった新しい試みをすることで英語の指導方法の幅を広げることができた。研修内容も新たな指導方法を模索していた私にとってとても新鮮で，特に「CAN-DO リスト」にもとづいた年間指導計画の立案，言語活動や毎回の授業の指導方法の計画の大切さもあらためて実感できたので，学んだことを今後の授業実践に大いに反映させたいと思う。また，意欲的に授業改善に取り組む先生方と出会い，自分自身がさらに成長したいという気持ちが高まった。リスニングだけでなく他の技能の指導法に関する講義や他の研修参加者との情報交換を通して，英語教師に必要な知識・技術を学んだこの研修に参加する機会をいただいたことと，今回出会ったアカデミアの先生方，研修参加者の先生方に心から感謝したい。今後はここで学んだことを大いに生かして，目の前の生徒に対する指導をさらに充実させていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

正頭英和.(2015).『中学校英語サポート BOOKS　5 つの分類×8 の原則で英語力がぐーんと伸びる！音読指導アイデア BOOK』明治図書
山本崇雄.(2015).『はじめてのアクティブ・ラーニング！英語授業』学陽書房
小川公代・Jim McKinley.(2008).『改訂版　Listening Laboratory Basic β』数研出版木

会話力を高めるスピーキングの継続的指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は２学年３クラス，計 114 名（男子：59 名，女子：55 名）の生徒である。全体的に明るく素直で，活動にも男女協力して取り組み，英語学習には意欲的である。どのクラスも，よく話を聞こうという雰囲気があるが，集中力に欠ける生徒もなかには見られる。また，小学校での外国語活動を経験している世代なので，ある程度英語には慣れ親しんでいる。進路については，ほとんどの生徒が大学進学を目指している。一般入試で第１志望の大学に挑戦してほしいが，推薦入試で合格できそうなところへ進学できればよいと考えている生徒も少なくない。

解決すべき課題

自信を持って英語での会話を続けることができる力を身につけさせたいが，クラスルームイングリッシュでの問いかけなどに対しても反応できる生徒が少なく，口頭でのリアクションが大切な英語コミュニケーションに慣れていないようである。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・事前アンケート調査（６月実施：回答者数 105）

生徒の英語学習への意識を把握するためにアンケートを実施した。

１．英語を話す力は必要だと思いますか。

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
89 人(84.8%)	16 人(15.2%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)

２．英語学習で難しいと思うことは何ですか（1 つ)。

話すこと	聞くこと	読むこと	書くこと
58 人(55.2%)	27 人(25.7%)	4 人(3.8%)	16 人(15.2%)

３．英語で身近な話題について会話を続ける力がありますか。

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
3 人(2.9%)	18 人(17.1%)	56 人(53.3%)	28 人(26.7%)

話す力について，明確に「必要である」と回答した生徒は 84.8%で，スピーキングスキルに対する意識は高いことがわかった。しかしその反面，55.2%の生徒が「話すこと」をもっとも難しいスキルであると感じている。また，「身近な話題について英語で会話を続ける力が（どちらかといえば）ある」と回答した生徒は，20.0%にとどまった。

リサーチ・クエスチョン

身近な話題について会話を続ける力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安:「身近な話題について会話を継続する力が身についている」といえる生徒が増え，1 分間の発話語数が増加する。

改善のための手だて

○ 会話表現を明示的に指導すれば，聞いたり，話したりするのに必要な知識や方略が身につき，会話を続けることができるようになるだろう。
・会話で使える表現リスト(Useful Expressions for Conversation)を作成，配布する。
・各表現の使用場面や働きについて説明し，練習させる。

○ 話す内容を準備させ，まとまりのある英語を話す活動を継続的に行えば，自信を持って流暢かつ論理的に話せるようになるだろう。
・“Think in Threes for Speaking” の活動を継続的に行う。
＜活動の手順＞
① 提示されたトピックについて，30 秒以内に話したいことを 3 つ考えてメモを作る。
② ペアになり，話し手はメモをもとに 1 分間話し，聞き手はリアクションをする。
③ 話し手と聞き手を交替する。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・事後アンケート調査（１２月：回答者数 114）
生徒の英語学習への意識の変化を把握するために，再度アンケートを実施した。

１．英語を話す力は必要だと思いますか。

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
108 人(94.7%)	5 人(4.4%)	1 人(0.9%)	0 人(0.0%)

２．英語学習で難しいと思うことは何ですか（1 つ)。

話すこと	聞くこと	読むこと	書くこと
71 人(62.3%)	16 人(14.0%)	10 人(8.8%)	17 人(14.9%)

３．英語で身近な話題について会話を続ける力がありますか。

ある	どちらかといえばある	どちらかといえばない	ない
9 人(7.9%)	38 人(33.3%)	57 人(50.0%)	10 人(8.8%)

英語を話す力について，明確に「必要」と回答した生徒は 94.7%まで増えた。「話すこと」がもっとも難しいスキルであると感じている生徒は 55.2%から 62.3%に増加しているが，これは，スピーキング活動をかなり増やしたことで，実際に経験してあらためて難しさを自覚した生徒が増えたためかもしれない。また，改善の目安とした会話を続ける力については，41.2%の生徒が（どちらかといえ

ば）身についていると回答しており，まだまだ少ないが，事前の 20.0%からは倍増した。項目 1（話す力の必要性の意識），項目 3（会話を継続する力の実感）の事前・事後の結果データを検定（Wilcoxon の符号付き順位検定）にかけたところ，有意な向上が認められた（$p = 0.04, 0.00 < 0.05$）。

・生徒の発話サンプルによる流暢さの分析

3 人の生徒について，“Think in Threes for Speaking”の活動時の実施初期の発話と，実施後期の発話をビデオ撮影し，流暢さの指標である Speech Rate(1 分間の発話語数)について比較・分析を行った（共通トピック：「昨日したことについて」）。

Speech Rate (1 分間の発話語数)

	Before	After
生徒 A	63	73
生徒 B	57	94
生徒 C	56	79

3 人とも流暢さが向上していることが認められる。生徒 B，C の顕著な伸びに比べて，生徒 A の伸びがゆるやかであるが，実施後期のビデオを見ると，話すことが思いつかずに戸惑っている様子がうかがえた。「昨日したこと」というトピックについて，前日に特別な出来事がなく，伝えるべき材料がなかったということが推察される。

Mean Length of Runs (ポーズ間の平均発話語数)

	Before	After
生徒 A	2.86	3.84
生徒 B	2.11	3.24
生徒 C	2.80	3.16

また，Mean Lengths of Runs (ポーズ間の発話語数)の分析も行ったところ，Speech Rate 同様に向上が見られた。こちらについては，生徒 C が他の 2 人よりも緩やかな伸びを示している。再度映像を確認した結果，生徒 C は発話の際に，一度日本語で話すことを考えて，それを英語に変換していると思われる様子が確認された。そのためにポーズが多くなってしまったのではないかと考える。

<u>教師の変化</u>

事前アンケートで生徒たちの英語学習に対する意識やニーズをしっかりと把握したうえで，授業をデザインし，実行するという計画性が身についた。授業をよりよくするには，つねに生徒たちの生の声に耳を傾ける必要があると感じ，日頃から生徒たちとの会話を大切にするようになった。授業改善に取り組むなかで，英語教育関連の文献から得た新しい活動を導入するようになった。さらに，それらの活動に取り組ませる前に，ねらいや効果について，生徒たちに説明するようになった。ことばを教える教師として生徒とのコミュニケーションを大事にしながら，英語教師としての専門性をさらに高めるために努力を続けたい。

今後の課題（次の改善点など）

今年度から授業でプレゼンテーションスライドを活用するようになり，生徒にも好評であったが，「おもしろかった」で終わらせないために，授業のどの場面でどのように使えば効果的であるか，という点については研さん・研究を続けたい。また，効果が見られた“Think in Threes for Speaking”の活動については，教科書英文の内容とのつながりや生徒の発達段階に応じたトピック選定などについて再考しながら，さらに発展させていきたい。

まとめ・感想

今回のアクション・リサーチで，英語学習に特化したアンケート調査を行い，客観的なデータ分析をしながら授業改善を行ったことで，もっといい授業をしたいという意欲が高まった。授業は生徒とともに創り上げていくものであるというスタンスをつねに持ちながら，一緒に成長できるような授業を実践したいと強く感じている。生徒に英語を楽しく学んでほしいと思うならば，まずは教師自身が楽しめるような授業をしていかなければならないと，この研修を通じて感じた。授業を設計して，実施し，振り返り，改善するというプロセスを自分自身も楽しみながら，学校や地域の英語教育の発展に熱意をもって貢献したい。

オーラルサマリーを中心にした授業デザインの工夫

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は１年生２クラス 79 名（男子 37 名，女子 42 名）の生徒である。学習に積極的に取り組み，落ち着いた姿勢で授業に参加している。英語の学習が好きな生徒が比較的多い一方，強い苦手意識を持つ生徒も少なくない。ほとんどの生徒が４年制大学への進学を希望し，難関大学合格を目指す生徒も多い。

解決すべき課題

中学校までの学習事項をよく理解しており，英語の学習に前向きに取り組むが，英語を話すことに対しては自信を持てない生徒が多い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・事前アンケート調査（６月：回答者数 77）

１．あなたは英語の学習が好きですか。＊無回答２人

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
14 人(18.2%)	32 人(41.6%)	19 人(24.7%)	10 人(13.0%)

２．英語を話す力は必要だと思いますか。＊無回答１人

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不必要	不必要
60 人(77.9%)	12 人(15.6%)	1 人(1.3%)	3 人(3.9%)

３．この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？3 つ選んで順位をつけてください。

	１位	２位	３位	総計
英語を聞く力	4 人(5.2%)	11 人(14.3%)	14 人(18.2%)	29 人(37.7%)
英語を話す力	30 人(39.0%)	11 人(14.3%)	9 人(11.7%)	50 人(64.9%)
英語を読む力	11 人(14.3%)	13 人(16.9%)	14 人(18.2%)	38 人(49.4%)
英語を書く力	11 人(14.3%)	14 人(18.2%)	18 人(23.4%)	43 人(55.8%)

英語の学習が好きな生徒の割合は多く，大学入試をかなり意識している一方で，英語を話す力は必要である，話す力を伸ばしたいと考えている生徒が多いことがわかった。

・英検 CAN-DO を用いた自己診断調査（７月：回答者数 79）

英語を話す自信の度合いを確認するために，英検 CAN-DO（スピーキング編）を用いた自己診断調査を行った。レベルによらず，授業で実際に行う活動に近いものにかかわる能力記述文を選んだ。

１. 読んだ本や見た映画について, そのあらすじを述べることができる。(英検準１級 CAN-DO より）

よくできる	だいたいできる	ある程度できる	少しできる	ほとんどできない
2 名(2.5%)	1 名(1.3%)	10 名(12.7%)	34 名(43.0%)	32 名(40.5%)

２．興味・関心のあることについて，自分の考えを述べることができる。(英検準２級 CAN-DO より)

よくできる	だいたいできる	ある程度できる	少しできる	ほとんどできない
7 名(8.9%)	27 名(34.2%)	27 名(34.2%)	15 名(19.0%)	3 名(3.8%)

３．調べたことについて，まとまりのある話をすることができる。(英検準１級 CAN-DO より)

よくできる	だいたいできる	ある程度できる	少しできる	ほとんどできない
1 名(1.3%)	1 名(1.3%)	8 名(10.1%)	20 名(25.3%)	49 名(62.0%)

自分の趣味・関心の範囲の話をすることにはある程度自信があるが，与えられたテーマについて順序よくまとまった英語で伝えるようなことには自信が持てていないことがあらためてわかった。

リサーチ・クエスチョン

読んだ英文の内容を，自分の意見や感想を交えて，自分の使える英語で，口頭で聞き手にわかりやすく伝えられるようにするには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：自分の英語で聞き手にわかりやすく伝えられると感じる生徒が 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ 会話の基本フレームや，よく用いられる基本表現を使った会話活動を継続すれば，英語を話すことに慣れ，抵抗感もより少なくなるだろう。

・会話の話題と基本的表現を黒板等に書き示して，教師・生徒間のやりとりでモデルを示す。

・フレームや基本表現を利用して伝えたいことを 1 分間考えた後，ペアで会話をさせる。

○ 意見や感想を交えた教科書英文のオーラルサマリーに取り組ませ，相互評価に基づく振り返りをさせれば，聞き手の理解を意識して話せるようになるだろう。

・ペアでお互いに発表，ルーブリック評価をさせ，伝わりにくかった表現を改善させる。

・再度発表で改善成果を確認させ，効果的に伝えるポイントを整理させる（「自己評価シート」)。

○ 英文の内容や構成を視覚的に理解するタスクを与えれば，概要や論理展開が明確になり，要約に役立てることができるだろう。

・グラフィックオーガナイザーによって本文の内容と自分の意見や感想を整理する。

＜オーラルサマリーのルーブリック＞

	情報量	意見・感想	伝わりやすさ
A	英文を読んで得た情報に加えて，関連する付加情報についても伝えている。	内容に関する自分の意見・感想を論理的に述べている。	つなぎことばの使用など理解を促す工夫をしながら，聞き手が理解できるよう話している。
B	英文を読んで得た情報を十分に伝えている	内容に関する自分の意見・感想を述べている。	聞き手が理解できるように話している。
C	英文内容の情報伝達が不十分である。	内容に関する自分の意見・感想を述べていない。	聞き手が理解できるように話していない。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・オーラルサマリーの自己評価

初回(９月)：Lesson５（回答者数 66)，最終回(１２月)：Lesson８（回答者数 74)

１．教科書本文の内容を自分の使える英語で，口頭で聞き手にわかりやすく伝えることができた。

	よく できた	だいたい できた	ある程度 できた	少し できた	ほとんど できなかった
Lesson５	１名(1.5%)	３名(4.5%)	29 名(43.9%)	31 名(47.0%)	２名(3.0%)
Lesson８	５名(6.8%)	９名(12.2%)	34 名(45.9%)	22 名(29.7%)	４名(5.4%)

２．内容に関して自分の意見や感想を，口頭で伝えることができた。

	よく できた	だいたい できた	ある程度 できた	少し できた	ほとんど できなかった
Lesson５	１名(1.5%)	６名(9.1%)	24 名(36.4%)	33 名(50.0%)	２名(3.0%)
Lesson８	４名(5.4%)	11 名(14.9%)	28 名(37.8%)	23 名(31.1%)	８名(10.8%)

読んだ英文の内容を自分の使える英語でわかりやすく伝えることが，「ある程度」以上できたという生徒は，3 か月余りで 49.9%から 64.9%まで増えた。内容に関する意見・感想について同様に感じた生徒は，47.0%から 58.1%まで増えている。改善の目安の 7 割には達しなかったが，今回の取組には一定の効果があったと言ってよいだろう。一方で，特に「意見・感想」について「ほとんどできなかった」という生徒が増え，1 割を超えてしまっている。活動を継続するにつれ，自分が考える意見・感想の質的レベルも上がり，「言いたくても言えなかった」ということがあったのかもしれない。

・英検 CAN-DO を用いた自己診断調査の比較（７月：回答者数 79，１２月：回答者数 75）

１．読んだ本や見た映画について，そのあらすじを述べることができる。(英検準１級 CAN-DO より)

	よくできる	だいたいできる	ある程度できる	少しできる	ほとんどできない
７月	２名(2.5%)	１名(1.3%)	10 名(12.7%)	34 名(43.0%)	32 名(40.5%)
１２月	２名(2.7%)	10 名(13.3%)	15 名(20.0%)	29 名(38.7%)	19 名(25.3%)

２．興味・関心のあることについて，自分の考えを述べることができる。(英検準２級 CAN-DO より)

	よくできる	だいたいできる	ある程度できる	少しできる	ほとんどできない
７月	７名(8.9%)	27 名(34.2%)	27 名(34.2%)	15 名(19.0%)	３名(3.8%)
１２月	15 名(20.0%)	19 名(25.3%)	28 名(37.3%)	11 名(14.7%)	２名(2.7%)

３．調べたことについて，まとまりのある話をすることができる。(英検準１級 CAN-DO より)

	よくできる	だいたいできる	ある程度できる	少しできる	ほとんどできない
７月	１名(1.3%)	１名(1.3%)	８名(10.1%)	20 名(25.3%)	49 名(62.0%)
１２月	１名(1.3%)	５名(6.7%)	７名(9.3%)	34 名(45.3%)	28 名(37.3%)

今回のオーラルサマリーにもっとも近い項目１について，「ある程度」以上できると判断する生徒は 16.5%から 36.0%にまで増加し，活動の成果がうかがえた。項目３については著しい伸びは見られないが，「ほとんどできない」が項目１以上に減少しているのが明るい兆候である。もともと 77.3%が「ある程度」以上できると回答していた項目２については，その割合が 82.6%まで向上したことから，フレームを用いた日常的な会話活動も効果的であったと思われる。

・タスクに取り組む生徒の様子

はじめは，オーラルサマリーで原稿を読みがちな生徒が多かったが，徐々に顔が上がるようになった。また「自己評価シート」には「自分のことばで要約できるようになった」「前より伝えられるようになった達成感がある」「次回はアイコンタクトに気をつけたい」など，成果や課題に的確に言及した記述が見られた。

教師の変化

生徒の状況を把握したうえで，身につけさせたい力，伸ばしたい力を明確にし，それをつねに意識して授業をデザインするようになった。特に今回は，「英語を話す力」に焦点をあて，オーラルサマリーを中心にした授業展開を考えることができた。また，生徒の主体的・対話的な活動を重視し，教師から与える情報量を削減して，生徒の自律的学習能力を尊重するようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・英語を話すことに慣れ，聞き手がわかりやすいように伝えようとする意識の定着は見られるが，読んだ英文の概要や要点をまとめることに対して難しさを感じる生徒はまだ多い。英文の構成を理解して，ポイントとなる部分をうまく読み取るためのトレーニングをさらに工夫する必要がある。
・話すことに重点を置いた活動を多く取り入れたため，語彙や文法のより深い知識を求める生徒は少し物足りなさを感じたかもしれない。生徒のニーズをより敏感にとらえ，より多くの生徒が満足できるよう授業計画を見直していく必要がある。

まとめ・感想

異動してきて１年目，それもほぼ全員が４年制大学への進学を希望する学校でどのような授業を行っていくべきか戸惑っているなか，研修が始まった。生徒の現状を把握し，そこからリサーチ・クエスチョンを設定して，アクションプランを立てるという流れは，授業を計画するうえで大きな助けとなった。目標を定め，その達成のための指導法を考え実践していくなかで，研修会において提供される情報，授業観察でいただいた助言，他の研修参加者との情報交換は大きな支えとなり，励みとなった。また，授業中の活動に積極的に取り組み，期待以上の成果を見せてくれる生徒たちを見て大きな喜びを感じることができた。しかし，まだまだ生徒全員を満足させる授業には程遠いと感じている。今回の研修に基づいて行った実践を振り返り，さらなる向上を目指して授業改善に取り組んでいきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

佐野正之(編著).(2000).『アクション・リサーチのすすめ』大修館書店
佐野正之(編著).(2005).『はじめてのアクション・リサーチ―英語の授業を改善するために』大修館書店

自信と意欲を高めるスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は１学年３クラス 120 名（男子 71 名，女子 49 名）の生徒である。ほとんど全員が４年制難関大学への進学を希望している。基礎学力は定着しており，学習意欲も高い生徒が多いが，誤りを恐れて人前で発表する場面では消極的になりがちである。大学入試を英語学習の目的ととらえている生徒が多く，スピーキング活動に意味を見いだせない生徒もいる。

解決すべき課題

・人前で英語を話すことに抵抗があり，間違えることを恐れて黙り込むなど，自信を持って発話することができない生徒が多い。
・話すこと自体に興味がない生徒が少数いる。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回英語の学習に関するアンケート（４月実施：回答者数 119）
　生徒のスピーキングに対する興味および自信を含め，英語学習全般に関する意識についてアンケートで調べた（スピーキングに関する項目のみ抜粋）。＊人数(%)

１．あなたはスピーキング力を伸ばしたいですか。

伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたくない	伸ばしたくない
21 (17.6)	54 (45.4)	35 (29.4)	9 (7.6)

２．身近なことについて簡単な英語で伝えることに自信がありますか。

自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
10 (8.4)	45 (37.8)	46 (38.7)	18 (15.1)

自由記述：「話せるようになりたい」19 (16.0)

スピーキング力を「(どちらかといえば)伸ばしたい」という生徒は 75 人(63.0%)で，これは他の 3 技能と比べて 20%から 30%低く，スピーキングに対する意識の低さがうかがえる。自由記述でもスピーキングに言及した生徒はわずか 19 人(16.0%)であった。また，身近なことについて簡単な英語で伝えることに「(どちらかといえば) 自信がある」という生徒は 55 人(46.2%)で半数以下であった。

・第１回スピーキングテスト（６月～８月実施：受験者数 120）
　テスト内容：任意の事物について，クイズ形式で説明，発表する。
　評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

	声の大きさ・明瞭さ (聞こえるか)	言語表現 (理解できるか)	非言語表現 (原稿を見ていないか)
◎	大きな声で明瞭に話しており，聞き取りやすい。	強弱や区切りをつける等工夫されていて，理解しやすい。	原稿を見ず，アイコンタクトを取りながら話している。
○	問題なく聞き取ることができる。	支障なく理解することができる。	原稿を見ずに話している。
△	耳をそばだてて聞けば聞き取ることができる。	概要程度であれば理解することができる。	原稿を確認することはあるが，発話時には見ずに話している。
×	聞き取れないい部分がある。	内容を理解することができない。	原稿を見ながら話している。

結果：人数(%)

	声の大きさ・明瞭さ	言語表現	非言語表現
◎	48 (40.0)	8 (6.7)	36 (30.0)
○	57 (47.5)	73 (60.8)	67 (55.8)
△	15 (12.5)	39 (32.5)	13 (10.8)
×	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (3.3)

「声の大きさ・明瞭さ」「非言語表現」の項目では○以上の生徒が全体の 8 割を超えているが，「言語表現」の項目では，3 割以上の生徒の発話に課題が見られ（△＋×），理解できる発話でも，抑揚や区切りがなく棒読みのようなものがほとんどで，指導の必要性を感じる結果となった。

リサーチ・クエスチョン

簡単な英語を使って，身近なことについて，相手に伝わるように，自信を持って話す力を身につけさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：評価ルーブリックのそれぞれの項目で，○以上となる生徒が全体の 9 割を超える。

改善のための手だて

○ 段階的に活動の負荷を上げてスピーチ練習をさせれば，自信を持って話せるようになるだろう。
- ペアやグループでの練習時間を設けることでスピーキングに対する自信の向上を図る。
- 前もって準備できる原稿の分量を徐々に減らすことで，自分の使える英語で即興的に話すことに自信を持たせるようにする。

○ 文強勢などの音声指導を明示的に行えば，より相手にわかりやすく話せるようになるだろう。
- 教科書の音読を含め，英語を発話する際に文強勢や間の取り方についての指導を継続して行う。

○ 実生活と関連づけたスピーキング活動をくり返し行えば，話すことへの関心がより高まるだろう。
- 談話能力(discourse competence)，社会言語能力(sociolinguistic competence)，人とうまくかかわる能力(people skills)など，スピーキングに付随する能力について説明し，英語で話すことの有用性を理解させる。
- 身近な話題を使ったプレ／ポストリーディング活動としてスピーキングを位置づけ，話すことへの動機づけを促す。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回英語の学習に関するアンケート（１２月実施：回答者数 120）

同様の質問項目でアンケートを行い，４月の調査結果と比較した。＊人数(%)

１．あなたはスピーキング力を伸ばしたいですか。

	伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたい	どちらかといえば伸ばしたくない	伸ばしたくない
４月	21 (17.6)	54 (45.4)	35 (29.4)	9 (7.6)
１２月	67 (55.8)	28 (23.3)	19 (15.8)	6 (5.0)

「スピーキング能力を（どちらかといえば）伸ばしたい」という生徒は 63.0%から 79.1%まで増加している。事前・事後データがそろっている 119 人について検定（Wilcoxon の符号付き順位検定）にかけたところ，統計学的な有意差が認められた（$p = 0.00 < 0.05$）。

２．身近なことについて簡単な英語で伝えることに自信がありますか。

	自信がある	どちらかといえば自信がある	どちらかといえば自信がない	自信がない
４月	10 (8.3)	45 (37.5)	46 (38.3)	18 (15.1)
１２月	48 (40.0)	47 (39.1)	17 (14.1)	7 (5.8)

「身近なことについて簡単な英語で伝えることに（どちらかといえば）自信がある」という生徒はほぼ 8 割まで増加し，事前・事後データがそろっている 119 人の変化にも有意差が認められた（Wilcoxon の符号付き順位検定： $p = 0.00 < 0.05$）。

「スピーキング力を伸ばしたい」「身近なことについて簡単な英語で伝えることに自信がある」という生徒はそれぞれ大幅に増加し，統計学的にも有意な向上が認められた。これは，英語で話す力の有用性を示しながら，年間を通して英語を使って授業を行い，教師と生徒または生徒同士での英語によるやりとりを意識的に多く取り入れてきたことの成果であると思われる。

・スピーキングテスト（１１月～１２月実施：受験者数 120）

テスト内容：「日本」を代表する任意の事物について，クイズ形式で説明，発表する。

評価方法：自作ルーブリックによる分析的評価

結果：人数(%)

	声の大きさ・明瞭さ		言語表現		非言語表現	
	４月	１２月	４月	１２月	４月	１２月
◎	48 (40.0)	89 (74.1)	8 (6.6)	22 (18.3)	36 (30.0)	67 (55.8)
○	57 (47.5)	30 (25.0)	73 (60.8)	81 (67.5)	67 (55.8)	50 (41.6)
△	15 (12.5)	1 (0.8)	39 (32.5)	17 (14.1)	13 (10.8)	2 (1.6)
×	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (3.3)	1 (0.8)
◎＋○	105 (87.5)	119 (99.1)	81 (67.5)	103 (85.8)	103 (85.8)	117 (97.5)

「声の大きさ・明瞭さ」「非言語表現」の評価項目で，◎と○を合わせた生徒の割合はそれぞれ 99.1%，97.5%になり改善の目安に達した。「言語表現」については目標値に届かなかったが，85.8%まで増加し，全項目で有意な向上が認められた（Wilcoxon の符号付き順位検定：いずれも $p = 0.00 < 0.05$）。

今回の取組によって，生徒のスピーキング力は向上したといえるだろう。特に発表前のペアやグループでの練習時間の効果が非常に高く，練習後に各項目について相互にフィードバックをさせたことで，ほぼ全員の発話が改善されていることが確認できた。目標に届かなかった「言語表現」については，４月時点での数値が他の項目より低かったが，伸び幅は一番大きかった（18.3%）。9 割に達しなかったのは，教師の指導力不足が一番の要因であると思われる。教科書音読の際には明示的な指導ができていても，生徒の発表に対してその場で強弱や区切りについてのフィードバックを十分に与えることができていなかった。そのため，音読練習で身につけたスキルを応用できた生徒だけが評価が高くなったと思われる。なお，この結果は教師がルーブリックで評価したものであるが，生徒による自己評価および相互評価にも各項目の顕著な伸びが見られた。

教師の変化

今回のアクション・リサーチを通して，生徒の英語力を高めるために授業の場でどのような活動を与え，どのような支援をすべきかということを再確認することができた。生徒はこちらが期待している以上に説明を聞き，指示に従って活動しようという姿勢を見せてくれたため，教師としての自信や意欲が高まった。また，生徒の発話に対するフィードバックについて，これまでは内容重視のコメントばかりしていたが，多角的なフィードバックを与えられるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

より的確に生徒の能力や課題を把握し，それに応じた指導を考え，効果を確認しながら実践していくためには，高い評価力・指導力が必要であるとあらためて感じた。今後も生徒のニーズや発達段階，指導目標に合致したルーブリックを開発するとともに，今回特に課題となった即興的なフィードバックの質も高めていく必要がある。また，個人としての改善にとどまらず，共通目標に基づく一致した指導と一体化した評価の実現のために，同僚の教師と協力しながら組織的授業改善に貢献したいと思う。

まとめ・感想

本研究を通して，生徒はこちらの指導についてこようと努力していることをあらためて知り，それに応えるために指導力をさらに高める必要があると強く感じた。また，これまではスピーキングテストの際に，授業中に努力している生徒には高い印象点をつけてしまいがちであったため，より客観的な評価にはルーブリックが必要不可欠であることを実感した。本研修では，能力の高い講師および他の受講者とともに，主体的かつ協働的に多くの指導法について深く学ぶことができ，アクティブ・ラーニングの有用性を生徒の立場から実感することができた。教師として自信を失いそうになったこともあったが，そのたびに講師の方々や他の受講者の先生方に支えられた。この研修に参加できたことに心から感謝するとともに，今後もさらなる授業改善のために絶えず自己研さんに努めていきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

Nation, I. S. P., & Newton, J. (2009). *Teaching EFL/ESL listening and speaking.* London: Routledge.
Sari, L. (2004). *Assessing speaking.* Cambridge: Cambridge University Press.
上田明子. (1995).『話せる英語術』岩波書店

話すことへの抵抗感を減らすスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は１年生１クラス，計 40 名（男子 19：女子 21）の生徒である。とても活発なクラスであり，ペアワークやグループワークには積極的に取り組む生徒が多い。全体的に英語の学習意欲も高く，定期試験の平均点は学年のなかでつねに上位である。一方で英語を使うことに対する苦手意識を持っている生徒も多い。大学（短期大学含む）への進学を考えている生徒が大部分を占めているが，推薦入試での進学に興味を持っている生徒が多い。

解決すべき課題

「英語を話せるようになりたい」という生徒は非常に多いが，「英語にするのが難しそうだ」と思うと途端に口を閉ざしてしまい，英語が口から出てこなくなってしまう。ある文法や表現を知識として「知っている」生徒でも，それを「使える」とは限らない。英語を話すことそのものに抵抗がある生徒も多い。授業中の活動を通して，英語を話すことに対する抵抗感をなくし，「知っている英語」を使って身近な話題について自信を持って口頭で伝えられる力を身につけさせたい。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語学習に関するアンケート（５月実施：回答者数 40）

１．あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
9 人（22.5%）	15 人（37.5%）	11 人（27.5%）	5 人（12.5%）

２．英語を話す力は必要だと思いますか。

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
32 人（80.0%）	6 人（15.0%）	2 人（ 5.0%）	0 人（ 0.0%）

３．英語の授業ではどのような力を伸ばしたいと思いますか（2 つまで選択可）。

話す力	聞く力	読む力	書く力	文法を使いこなす力
29 人（72.5%）	14 人（35.0%）	6 人（15.0%）	11 人（27.5%）	17 人（42.5%）

４．あなたは英語を話すことに抵抗がありますか。

ない	あまりない	少しある	ある
11 人（27.5%）	8 人（20.0%）	16 人（40.0%）	5 人（12.5%）

５．あなたは自分の英語を話す力に自信がありますか。

ある	少しある	あまりない	ない
0 人（ 0.0%）	4 人（10.0%）	12 人（30.0%）	24 人（60.0%）

６．話すときに英語が出てこない場合，あなたはなんとかして伝える努力＊ができると思いますか。

なんとかして伝える努力ができると思う	対応できないと思う
17 人（42.5%）	23 人（57.5%）

＊「なんとかして伝える努力」－ 別の簡単な表現で言い換えようとしたり，ボディランゲージを使って伝えようとしたりすること（口頭で説明済）

英語が好きな生徒と嫌いな生徒が混在しているが，大多数の生徒が英語を話す力が必要だと認識している。伸ばしたい力についても，75%の生徒が「英語を話す力」と回答している。英語を話すことについて抵抗があると感じる生徒も抵抗がないと感じる生徒もだいたい半々であるが，一方英語を話す力に自信がない生徒は全体の 90%を占めている。話すことそのものには抵抗はないと感じるが，自分の話す力には満足していない生徒もいることがわかった。話すなかで英語が出てこないときに,「対応できない」と思う生徒が半数以上いたことから，このことが，自信が持てないことの一因であると思われた。

・生徒への英語インタビュー（ビデオ撮影にて記録）

クラスから３名の生徒を無作為に選出し，英検準２級の過去問から抜粋した質問を使用して生徒にインタビューし，その受け答えを記録（録画）した。インタビューの間,「うー…」「あー…」などの音を連発したり，目をそらしたり，もじもじとする行動は,（多少の緊張も考慮に入れなくてはならないが,）話すことに対する自信のなさの表れであるように思われた。日本語で「ごめんなさい（何て言えばいいか）わからないです」と返してしまったりする様子も見られた。

リサーチ・クエスチョン

英語を話すことへの抵抗感を減らし，身近な話題について，知っている英語を使って適切に伝える力を身につけさせるためには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・アンケートで「英語を話す力に自信がついた」,「英語を話すことへの抵抗が減った」と回答する生徒が，全体の８割を超える。

・英語インタビューにおいて,「話す力」が向上する。

改善のための手だて

○ 平易な英語で表現する方略を指導すれば，話すことへの抵抗感が減り，知っている英語でさまざまな内容を表現できるようになるだろう。

・「遠慮なく聞いてよ」,「もったいないじゃないか」,「賞味期限は明後日です」などの表現を，平易な英語で表現できることを示し，自然な（会話の）文脈に入れこんで話す練習をする。

・日頃の授業での Speaking Production の活動中に，生徒が言いよどんだ表現を取り上げ，どのような英語の表現が可能だったか，その都度全体に指導する。

○ 話の流れを相手に伝える活動を継続的に行えば，まとまりのある英語を話せるようになるだろう。

・絵や図表を見ながら，教科書本文のリテリング活動を行うとともに，その練習として 4 コマ漫画のストーリーテリングの活動も行う。

・身近な話題について，連想する３つの語句を用いて簡単なスピーチを作る活動を継続的に行う。

・発話の時間制限の負荷を徐々に大きくする(3 分－2 分－1 分など)ことで流暢さと自信を高める。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回 英語学習に関するアンケート（１２月実施：回答者数 39）

※それぞれ［　］内の数字は前回調査における割合

１．あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
14 人(35.9%) [22.5%]	16 人(41.0%) [37.5%]	7 人(18.0%) [27.5%]	2 人(5.1%)　[12.5%]

２．英語を話す力は必要だと思いますか。

必要	どちらかといえば必要	どちらかといえば不要	不要
36 人(92.3%) [80.0%]	2 人(5.1%)[15.0%]	1 人(2.6%) [5.0%]	0 人(0.0%) [0.0%]

３．英語の授業ではどのような力を伸ばしたいと思いますか（2 つまで選択可）。

話す力	聞く力	読む力	書く力	文法を使いこなす力
34 人 (87.2%)[72.5%]	13 人 (33.3%)[35.0%]	3 人 (7.7%)[15.0%]	11 人 (28.2%)[27.5%]	15 人 (38.5%)[42.5%]

４．あなたは英語を話すことに抵抗がありますか。

ない	あまりない	少しある	ある
3 人(7.7%) [27.5%]	16 人(41.0%) [20.0%]	18 人(46.2%) [40.0%]	2 人(5.1%) [12.5%]

５．あなたは自分の英語を話す力に自信がありますか。

ある	少しある	あまりない	ない
0 人(0.0%) [0.0%]	5 人(12.8%) [10.0%]	22 人(56.4%) [30.0%]	12 人(30.8%) [60.0%]

６．話すときに英語が出てこない場合，あなたはなんとかして伝える努力ができると思いますか。

なんとかして伝える努力ができると思う	対応できないと思う
32 人(82.1%)　[42.5%]	7 人(17.9%)　[57.5%]

※質問７と質問８は第２回アンケートでのみ実施

７．半年前と比べて，英語を話すことに対する抵抗感は減りましたか。

減った	どちらかといえば減った	どちらかといえば増えた	増えた
19 人(48.7%)	20 人(51.3%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)

８．半年前と比べて，自分の英語を話す力に自信がつきましたか。

ついた	どちらかといえばついた	どちらかといえばついていない	ついていない
8 人(20.5%)	30 人(76.9%)	1 人(2.6%)	0 人(0.0%)

事後のアンケートの回答者全員が，半年前の調査時と比べて英語を話すことに対する抵抗感が「減った」または「どちらかといえば減った」と回答した（質問７）こと，英語を話す力に自信が「ついた」または「どちらかといえばついた」と感じている生徒の割合が 97%と非常に高く出たこと（質問８）から，今回の授業改善にはある程度の効果があったといえるだろう。英語を話す時に英語が出てこなくなってしまった場合でも「なんとかして伝える努力ができると思う」と答えた生徒の割合が約 2 倍に増加した（質問６）ことも大きな成果である。スピーキング活動を授業で定期的に，また頻繁

に行ったことがこの結果につながったと考えられる。英語学習に対する好意，スピーキング力の必要性の認識，そしてスピーキングに対する向上心も，それぞれ増加した。

・第２回 生徒への英語インタビュー（ビデオ撮影にて記録）

第１回と同じ３名の生徒に対して，英検準２級の過去問から抜粋した質問などを使用してインタビューし，その受け答えを記録（録画）した。この３名には，英語を話す力（流暢さや正確さを含んだ総合力）に大きな変化は観察されなかったが，直接的な表現が出てこなくても，別の表現を使おうとするなど，「なんとかして伝える努力」が観察された。

教師の変化

各授業における目標を明確に設定し，生徒にも意識させるようになった。それにともない，生徒に各活動の目的を明示し，授業の「流れ」が明確に伝わる指示をすることで，授業に「めりはり」をもたせることができるようになったと感じている。また，研修同期の教師，同僚の教師，そのほか他校の教師と授業改善について意見を交換したり，英語授業に関する文献を読んだりする頻度が増えるなど，授業改善への意識も向上したと思う。

今後の課題（次の改善点など）

今回のリサーチにおいて，生徒のスピーキングに対する「意識」の向上は見て取れたものの，一方で実際にスピーキング力がどれくらい高まったのかというところまでは不明である。今後は，スピーキング力をより客観的に測定できる方法を考えながら，さらに生徒のスキルアップを目指した授業づくりを心がけたい。また，アクティブ・ラーニングの視点から，生徒が生徒に教えるピア・ラーニングの活動を導入した授業にも挑戦していきたい。

まとめ・感想

研修を通じて，自分の授業を見つめ直し，改善点を発見し，仲間との意見交換をも通じて工夫した授業を展開し，さらにアンケート調査によって指導の効果を分析し次につなげるという，アクション・リサーチの手法による授業改善法を学ぶことができた。国際言語文化アカデミアの先生方，一緒にこの研修を受講した先生方は，どなたも熱意があり，それぞれの信念やメソッドを持ち，心から尊敬できる先生方であった。この先生方と研修の時間を共有して，学び吸収する時間を与えられたことをうれしく思う。研修を通じてさまざまな場面で受けた的確な助言や指摘，受講していた他の先生方の英語力や授業力は，本当に刺激的なものであり，自分も今後もっと成長して授業力向上のために研さんを積まなければならないと感じさせてくれた。得た学びは今後出会うであろう同僚教師たちと共有していきたい。

授業改善にあたって参考にした資料等

松村昌紀.(2009).『英語教育を知る 58 の鍵』大修館書店

樋口忠彦・緑川日出子・高橋一幸(編著).(2007).『すぐれた英語授業実践 よりよい授業づくりのために』大修館書店

主体的な読解を促すリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は２年生１クラス，合計 39 名（男子 22 名，女子 17 名）の生徒である。クラスの雰囲気は明るくにぎやかだが，授業内活動や質問に対して積極的に取り組み，発言する生徒は数人に限られており，指示された活動には素直に参加するが，受動的な態度の生徒が大半である。進路は，約 6 割が 4 年制大学進学希望，約 2 割が専門学校志望，残り約 2 割は未定である。進学については，AO 入試や推薦入試を希望する傾向が強い。

解決すべき課題

教科書本文や英検準２級程度の英語長文を読んで理解し，その文を英語で要約したり，意見を述べ，疑問に思ったことを質問したりする力を身につけてほしいと考えているが，未知語を類推しながら読解する力が不十分で，日本語の逐語訳がないと不安になる生徒が多く，自分の力で内容を理解しようという意識が低い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・アンケート調査－英語学習，英文読解に対する意識(６月実施：回答人数 39)

１．英語学習・英文読解について

質問 ① あなたは英語の学習が好きですか
② 英語の授業でペアワークやグループワークに積極的に取り組めていますか
③ 教科書の英文の内容を理解できていると思いますか
④ 英文を読む時，わからない語があっても全体の内容を理解しようとしていますか
⑤ 英語の文章を授業以外で読む機会がありますか

A：あてはまる　B：どちらかといえばあてはまる

C：どちらかといえばあてはまらない　D：あてはまらない

⑥1 週間の英語の家庭学習時時間

	①	②	③	④	⑤	⑥	
A	10 人 (25.6%)	11 人 (28.2%)	5 人 (12.8%)	8 人 (20.5%)	8 人 (20.5%)	4 時間以上	0 人 (0.0%)
B	23 人 (59.0%)	21 人 (53.8%)	30 人 (76.9%)	23 人 (59.0%)	10 人 (25.6%)	2 時間以上 4 時間未満	6 人 (15.4%)
C	6 人 (15.4%)	4 人 (10.3%)	4 人 (10.3%)	7 人 (17.9%)	16 人 (41.0%)	1 時間以上 2 時間未満	5 人 (12.8%)
D	0 人 (0.0%)	2 人 (5.1%)	0 人 (0.0%)	1 人 (2.6%)	5 人 (12.8%)	1 時間未満	28 人 (71.8%)

*無回答 1

・英検準２級読解テスト(６月：受験者数 38)

１．選択問題(4 問)

正答数	0 問	1 問	2 問	3 問	4 問
人数	4 人	5 人	11 人	16 人	2 人
割合	10.5%	13.2%	28.9%	42.1%	5.3%

２．英文に対する意見とその理由を書く記述問題 (1 問－自作追加問題)

回答	無回答	誤答	意見のみ	意見とその理由
人数	26 人	9 人	3 人	0 人
割合	68.4%	23.7%	7.9%	0.0%

アンケートの結果から，80%以上の生徒が「英語学習が好きである」と感じているが，授業以外で英文を読む機会は少なく，学習時間も極端に少ないことがわかった。

また，選択問題では 47.4%の生徒が 3 問以上正答しているものの，英文全体の理解に基づいて理由を明確にしながら意見を述べることができていない。ピンポイントの情報検索ができる生徒でも，英文全体の概要を理解し，それについて考える力が身についていないことがわかった。

リサーチ・クエスチョン

英文を主体的に読んで，深く理解できるようになるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検準２級程度の読解テストの要点問題の正答率が向上し，理由を明確にしながら自分の意見を述べられる生徒が全体の 8 割以上になる。

改善のための手だて

○ 段落ごとに英問作成・英答練習を行えば，英文の概要や要点を的確に理解できるようになるだろう。
- ・段落ごとに概要やキーワードに関する Q&A を作る練習をする。
- ・教科書以外の英文でも同様の練習をする。

○ 英問英答の活動をもとに，自分の意見を入れたサマリーを書く練習をすれば，英文を主体的に読むようになり，内容理解が深まるだろう。
- ・段落ごと概要を確認する Q&A を利用し，サマリーを作る練習をする。
- ・サマリーを作ったうえで，自分の意見や感想を書く練習をする。
- ・レッスンのパート終了ごとに意見を問うような質問を与える。

○ 初見の英文で英問英答・サマリーライティングの活動を行えば，読解のストラテジーを使いながら英文を読むことに慣れ，英文を深く理解できるようになるだろう。
- ・家庭学習として初見の英文を読ませ，ワークシート（Q&A，サマリー，意見のタスク）に取り組ませ，各自にフィードバックを与える。
- ・授業始めに，短い英文を 2 分で読んで，5 分で内容に関する Q&A または 3 行サマリーと意見を書くタスクを完成させるという活動を行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・英検準２級読解テストー中間調査(９月：受験者数 38)

１学期後半に教科書本文を使って Q&A やサマリーの練習をさせ，夏季休業中に自作の Q&A やサマリーを作る課題を与えたあと，事前調査と同様の調査を行った。

１．選択問題(4 問)

正答数	0 問	1 問	2 問	3 問	4 問
人数	1 人	5 人	11 人	12 人	9 人
割合	2.6%	13.2%	28.9%	31.6%	23.7%

２．英文に対する意見とその理由を書く記述問題 (1 問－自作追加問題)

回答	無回答	誤答	意見のみ	意見とその理由
人数	24 人	6 人	3 人	5 人
割合	63.2%	15.8%	7.8%	13.2%

選択問題では 55.3%の生徒が 3 問以上正答しており，事前調査から 7.9%上昇している。また，記述問題で理由を付けて内容に関する意見を記述した生徒が 0.0%から 13.2%に上昇，無回答の生徒もわずかながら減少した。そのため，これまで通りの指導と初見の英文での内容把握やサマリーの練習を継続することにした。

・アンケート調査－英語学習，英文読解に対する意識(１２月実施：回答人数 38)

（質問項目は事前調査と同じ）

	①	②	③	④	⑤	⑥	
A	10 人 (26.3%)	5 人 (13.2%)	4 人 (10.5%)	7 人 (18.4%)	7 人 (18.4%)	4 時間以上	0 人 (0.0%)
B	16 人 (42.1%)	29 人 (76.3%)	28 人 (74.4%)	21 人 (55.3%)	8 人 (21.1%)	2 時間以上 4 時間未満	2 人 (5.3%)
C	9 人 (23.7%)	4 人 (10.5%)	5 人 (13.2%)	8 人 (21.1%)	15 人 (39.5%)	1 時間以上 2 時間未満	13 人 (34.2%)
D	3 人 (7.9%)	0 人 (0.0%)	1 人 (2.6%)	2 人 (5.3%)	8 人 (21.1%)	1 時間未満	23 人 (60.5%)

・英検準２級読解テスト(１２月：受験者数 38)

１．選択問題(4 問)

正答数	0 問	1 問	2 問	3 問	4 問
人数	3 人	4 人	14 人	10 人	7 人
割合	7.9%	10.5%	36.8%	26.3%	18.4%

２．英文に対する意見とその理由を書く記述問題 (1 問－自作追加問題)

回答	無回答	誤答	意見のみ	意見とその理由
人数	20 人	4 人	6 人	8 人
割合	52.6%	10.5%	15.8%	21.1%

英語学習が好きと答えた生徒が減ったのは残念だが，授業活動に積極的に参加していないという生徒が減ったことから，さまざまな読解課題を通して授業への参加意識は高まったのではないかと思う。読解テストについては，選択問題に 3 問以上正答した者の数は 44.7%と減少し，記述問題に意見とその理由を回答できた人数も 21.1%と改善の目安には到底及ばない結果となってしまった。期末試験直後に実施したため，生徒の事後調査への意欲が十分ではなく，また，初見の英文を使った練習期間が短かったことが原因であると思われる。

しかし，全体の事前・中間・事後の記述問題の回答を比較すると，無回答の生徒数が徐々に減少している。また，事後調査の選択問題に 3 問以上正解した 17 名を取り出して平均点の推移を比較したところ，下の表が示すように徐々に平均点が伸び，記述問題においても理由を付けて意見を述べた人数が増えている。生徒への動機づけを工夫し，長期に取り組むことで今後の改善が見込まれるのではないかと思われる。

		事前調査	中間調査	事後調査
選択問題	正答数(平均)	2.7 問	3.1 問	3.4 問
記述問題	意見とその理由	0 人	4 人	7 人
	無回答	10 人	8 人	5 人

教師の変化

・研修で得た教授法や活動を積極的に授業に取り入れ，そのことを通して各授業や単元ごとに自分の授業を振り返ることが多くなった。
・自分の教えている生徒の特徴や進路，学習方法などをより深く考えるようになった。
・学校全体での情報交換や目標の共有などの必要性をより強く認識し，同僚の教師との意見交換や今後の計画の作成をより積極的に行うようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・より深く主体的な読解をさせるには，生徒への動機づけが大切であると感じた。生徒の興味をひく題材を選定し，その題材をもとに意見交換の機会を設けるなど授業内で動機づけを高めるような発展的活動を設定し，生徒の意欲を維持できるよう工夫したい。
・生徒のニーズや好み，性格などのより詳しい分析により，全体としてだけでなく個々がより多くを学べる条件や教授法を組み合わせ，授業設計を工夫していきたい。

まとめ・感想

この研修を通し，多くの教授法や指導技術，授業設計のしかたに関する知識を得ることができた。毎回の研修のあと，日々の授業に少しずつ新しい活動を取り入れたり，従来のワークシートを改善したりとさまざまな角度から自分の授業を振り返ることができたのは大きな収穫である。

授業改善プロジェクトでは，自分の教えている生徒についてあらためてじっくりと考えることができたと思う。自校の生徒の持つ特徴や進路，学習のしかたに合わせた授業設計を今後も心がけたい。生徒の学習意欲や英語力を高めるために，自分自身も教師として学ぶべきことが多くあると感じている。英語そのものに関する知識についても指導技術についてもさらなる向上を図りたい。

読解ストラテジーの指導とポストリーディング活動の工夫

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は，３年生２クラス，計 80 名（男子 36 名，女子 44 名）の生徒である。ほぼすべての生徒が４年制大学への進学を希望している。どちらのクラスも，英語に対する学習意欲は高く，個々の課題には黙々と熱心に取り組み，ペアワークやグループワークでも積極的に活動する。基本的な語彙・文法知識を使って，英文を日本語に訳すことはあまり苦労せずにできている。

解決すべき課題

「１文１文の英文を日本語に訳すことができても，英文全体として何を言いたいのかわからない」という生徒が多い。パッセージの概要を把握する力や要点となる文を読み取る力，文と文のつながりを整理する力が欠けている生徒が多いといえる。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・大学入試センター試験第６問の結果（７月実施：受験者数 75）

初見の英文で，パラグラフの要点やパッセージの概要を読み解く力がどれくらい身についているかを調べるために，大学入試センター試験の筆記問題の第６問を出題した。第６問は，各パラグラフの要点を問う問題や本文のタイトルを選ぶ問題の計６問から構成されており，生徒の読解力を測るうえで適していると考えた。多くの生徒が志望する大学のセンター試験による合格正答率は 80%以上で，ここでは６問中５問の正答ということになるが，最終到達目標に至るための中間目標として６問中４問の正答（正答率 66.7%）を目指すことにした。７月のテストで６問中４問以上正答できた生徒は，全体の 42.7%であった。

実施月	N	正答数ごとの人数（%）						
		０問	１問	２問	３問	４問	５問	６問
７月	75	４人 （5.3%）	７人 （9.3%）	12 人 （16.0%）	20 人 （26.7%）	15 人 （20.0%）	10 人 （13.3%）	７人 （9.3%）

リサーチ・クエスチョン

やや長めの初見の英文を辞書なしで読んで，概要や要点，話の展開を読み取る力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：大学入試センター試験（第６問）の設問で，6 問中 4 問以上正答できる生徒の割合が 7 割以上になる。

改善のための手だて

○ 初見の英文読解に自力で取り組ませれば，まとまった英文を読むことに慣れ，読解力の向上を確認できるだろう。
・リーディングストラテジーを明示的に指導する。
・初見の大学入試センター試験の第６問に，複数回取り組ませる。

○ 内容を視覚的にまとめるタスクを与えれば，英文の流れや論理展開をより的確に読み取れるようになるだろう。
・グラフィックオーガナイザーを使って教科書英文の内容を視覚的にまとめさせる。

○ パッセージの概要や要点をまとめるタスクを与えれば，パッセージの概要や要点をつかむ力が高まるだろう。
・パラグラフのトピックセンテンスやキーワードを抜き出させる。
・パラグラフの概要や要点を問う質問に答えさせる。
・パッセージの概要や要点を英語や日本語で書かせたり口頭で発表させたりする。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・英文読解に関する意識調査（１２月：回答者数 76）

質問①：次の読解ストラテジーはそれぞれどれくらい重要だと思いますか。

１．序論・本論・結論の論理構成に意識を向ける。
２．各パラグラフのトピックセンテンスに意識を向ける。
３．ディスコースマーカーの働きに意識を向ける。
４．「メインアイディア⇒具体例」の論理構造に意識を向ける。

	1	2	3	4
とても重要である	25 人(32.9%)	39 人(51.3%)	44 人(57.9%)	26 人(34.2%)
重要である	42 人(55.3%)	33 人(43.4%)	30 人(39.5%)	47 人(61.8%)
どちらともいえない	8 人(10.5%)	3 人(3.9%)	2 人(2.6%)	3 人(3.9%)
重要ではない	1 人(1.3%)	1 人(1.3%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)
まったく重要ではない	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)

どのストラテジーについても 88%以上の生徒が，「とても重要」あるいは「重要」だと感じているということがわかった。ほとんどの生徒が英文を読む際に，リーディングストラテジーについて，少なくとも意識はできるようになったと言ってよいだろう。

質問②：次の活動は読解力を身につけるのにそれぞれどのくらい重要だと思いますか。

活動１　パラグラフ間の構造やパラグラフ内のセンテンスの関係を視覚化する。

活動２　パラグラフの内容を１文要約する。

活動３　100 字程度の日本語サマリーを書く。

活動４　50 words 程度の英語サマリーを書く。

活動５　15 秒程度の口頭サマリーをする。

	活動１	活動２	活動３	活動４	活動５
とても重要である	10 人(13.2%)	21 人(27.6%)	16 人(21.1%)	12 人(15.8%)	8 人(10.5%)
重要である	34 人(44.7%)	37 人(48.7%)	33 人(43.4%)	33 人(43.4%)	22 人(28.9%)
どちらともいえない	26 人(34.2%)	17 人(22.3%)	26 人(34.2%)	29 人(38.2%)	38 人(50.0%)
重要ではない	6 人(7.9%)	1 人(1.3%)	1 人(1.3%)	1 人(1.3%)	6 人(7.9%)
まったく重要ではない	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)	0 人(0.0%)	1 人(1.3%)	2 人(2.6%)

どの活動についても，否定的な評価は少なく，ある程度納得して取り組んでいたことがうかがえる。自由記述欄にも活動を高く評価するコメントが多数見られた。しかし,「どちらともいえない」という意見も少なくなく，特に「活動５（口頭サマリー)」では半数に上っている。英語による要約活動は，ひと通り理解ができたあとの活動であり，かつライティング力や即興のスピーキング力も求められるため,「読解力」そのものを高めたかどうか判断できない生徒や難しさを感じた生徒が多かったのかもしれない。要約活動を，読解力を統合的に高める活動としてより明確に定義し，その目的をしっかりと理解させる必要があるだろう。

・読解力テスト（大学入試センター試験「第６問」）

回	実施月	N	正答数ごとの人数 (%)						
			0 問	1 問	2 問	3 問	4 問	5 問	6 問
1	7 月	75	4 人 (5.3%)	7 人 (9.3%)	12 人 (16.0%)	20 人 (26.7%)	15 人 (20.0%)	10 人 (13.3%)	7 人 (9.3%)
2	9 月	75	1 人 (1.3%)	3 人 (4.0%)	11 人 (14.7%)	13 人 (17.3%)	23 人 (30.7%)	16 人 (21.3%)	8 人 (10.7%)
3	１０月	68	1 人 (1.5%)	4 人 (5.9%)	11 人 (16.2%)	25 人 (36.8%)	7 人 (10.3%)	15 人 (22.1%)	5 人 (7.4%)
4	１１月	75	1 人 (1.3%)	2 人 (2.7%)	2 人 (2.7%)	8 人 (10.7%)	21 人 (28.0%)	22 人 (29.3%)	19 人 (25.3%)
5	１２月	69	0 人 (0.0%)	2 人 (2.9%)	11 人 (15.9%)	11 人 (15.9%)	18 人 (26.1%)	17 人 (24.6%)	10 人 (14.5%)

英文トピックの親しみやすさや生徒の予備知識の有無によって難易度が異なる場合もあるが，第４回，第５回で４問以上正答した生徒の割合は，第１回から第３回のいずれの回よりも大きくなっており，それぞれの平均は 74.0%(第４～５回)，48.4%(第１～３回)で，改善の目標は概ね達成したと言ってよいだろう。さらに，正答数１問以下の生徒が減少したことも大きな成果である。

教師の変化

・授業改善のためには，生徒の意識や達成感などにかかわる質的データとテストなどの数量的データを活用することが重要であるということを再認識した。
・授業の目標を生徒に提示し，生徒と目標を共有しながら，授業設計をしていけるようになった。
・第二言語習得理論や応用言語学などの知見を得て，より効果的な指導ができるようになった。
・グラフィックオーガナイザーを設計することや本文の概要や要点を問う質問を作ることで，英文のテキスト構造を意識するようになった。
・同僚教師が目標や指導法を共有し，支え合って授業改善をすることの重要性をあらためて認識した。

今後の課題（次の改善点など）

・授業設計や英語教育，第二言語習得に関する知識を，文献購読や外部の研究会，研修などを通じて，さらに充実させていきたい。
・一人ひとりの生徒の学習状況を把握し，励ましながら，ともに成長できるような授業づくりに努めていきたい。
・同僚の教師と目標や指導方法を共有しながら，組織的に授業改善していく体制を整えていきたい。

まとめ・感想

これまでは，生徒の英語力向上に役に立つと感じた指導法や活動を，場当たり的に授業に盛り込んでいた。しかし，それでは，その場その場の手応えは感じられたとしても，長期的指導の結果としての生徒のスキル向上は保証できないとわかった。今回の研修では，研究テーマを設定し，それをつねに意識しながら，研修で得た知識を活用して授業を設計することができた。それによって，授業にまとまりが生まれ，生徒とともに授業の効果を実感することができた。また，研修中やその前後に，アカデミアの先生方，ともに研修を受けていた先生方から多くの温かいサポートをいただいた。自分自身が学び手として，そのようなサポートに勇気づけられ，高いモチベーションを持って，研修に取り組むことができた。どれだけ，理論的な知識を持っていても，英語の運用能力が高くても，生徒に「勉強したい」と思わせることができなければ，教育者としては力量不足である。そのような思いを新たにできたことも，この研修の成果であると感じる。

授業改善にあたって参考にした資料等

門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著).(2010).『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店
金谷憲（編著）・高山芳樹・臼倉美里・大田悦子(著).(2014).『英語教育を変える！訳読オンリーから抜け出す 3 つのモデル』アルク

意欲と自信を高めるリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は２年生２クラス，計 77 名（男子 29 名，女子 48 名）の生徒である。英語が不得意と考えており，最初からあきらめてしまっている生徒が多い。家庭学習の習慣がなく，基礎的な学習事項がなかなか定着しない。コミュニケーション活動などにはよく取り組み，積極的に発表し明るい生徒が多いが，授業の最後まで集中力が持続しない。進路は８割が進学希望で，内訳は４割が４年制大学，６割が専門学校進学希望である。

解決すべき課題

自分は英語が苦手であるという固定観念を持っている生徒が多い。ある程度まとまりのある英文読解では，未知語を見た時点で，それ以上読み進めることをあきらめてしまいがちである。また，フレーズごとの日本語訳を配布しているが，文章全体の概要把握まで至っていない。パラグラフごとに 5W1H を意識し，未知語があっても意味を推測しながら文章を最後まで読み通し，文章全体の概要をおおまかにつかめるようになれば，苦手意識が低くなり，授業に対して取り組む姿勢が前向きになるだろうと考えている。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回授業改善アンケート（９月実施：回答者数 61）

生徒の英語学習への意識，英語への興味，理解度についてアンケートを実施した。

１．あなたは英語の学習が好きですか。＊無回答１

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
13 人（21%）	21 人（34%）	20 人（33%）	6 人（10%）

２．今までの授業で読んだ英文の内容を理解できていましたか。＊無回答１

理解できていた	まあまあ 理解できていた	あまり 理解できていなかった	まったく 理解できていなかった
14 人（23%）	25 人（41%）	17 人（28%）	4 人（ 7%）

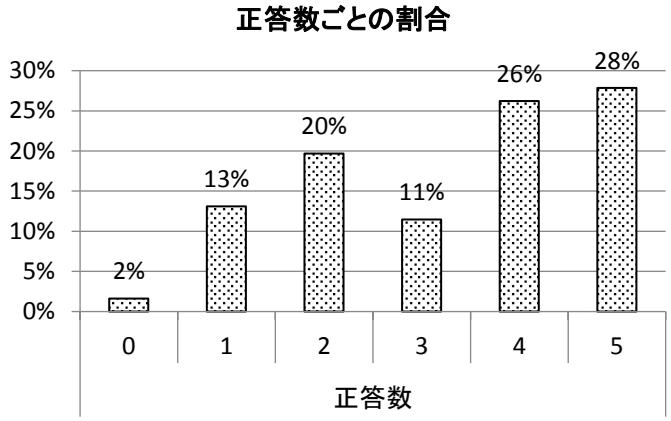
「好き」または「どちらかといえば好き」と答える生徒の割合が約半分であり，１学期の始めに実施した簡単なアンケートでは，英語が苦手であまり好きではないという生徒がほとんどだったことを考えると，少しほっとした結果であった。しかし，「英語が嫌い」「どちらかといえば嫌い」と答える生徒がまだ半数近くを占めていた。その理由としては，「高校に入学して知らない単語や文法が多過

ぎて理解できない」「単語がわからな過ぎて考える気にならない」などが挙がっていた。コミュニケーション英語Ⅱ(4 単位)で使用している教科書の本文読解にも集中して取り組めないようであった。しかし,「理解できていた」「まあまあ理解できていた」と回答している生徒が 39 人(64%)いたことから，生徒の実際の読解力を客観的に測定することにした。

・第１回英検３級テスト（９月実施：受験者数 61）

英検３級の読解問題４C（設問 5 問：約 250 語）を使って，生徒の読解力の現状を調べた。

正解数	0 問	1 問	2 問	3 問	4 問	5 問
人　数	1 人	8 人	12 人	7 人	16 人	17 人



5 問中 3 問以上正解した生徒の人数は 40 人(66%)であった。研究を始める前は４級の問題で読解力を測定することを考えていたが，３級の問題にも十分に挑戦できることがわかった。そこで，さらに読解力を伸ばすとともに，英語学習に対する意欲と自信を高めたいと考えた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

やや長めの初見の説明文を読んで，概要や要点を読み取る力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検３級の長文読解問題に 6 割以上（5 問中 3 問以上）正答できる生徒が，全体の 7 割以上になる。

<u>改善のための手だて</u>

○ トピックに関連した生徒の身近な話題を使ってプレリーディング活動を行えば，英文を読むことに対する抵抗感がなくなるだろう。

・教科書本文の内容について，生徒に身近な話題から導入し，興味を持たせるような活動をする（ペア，グループでトピックについて自由に話し合う，発表する，関連する動画を視聴する等）

・テキストのトピックに関する知識を活用して内容を予測させる。

・本文を簡単な表現にリライトし，オーラルイントロダクションを行う。

○ 概要や要点を視覚的にまとめるタスクを与えれば，主体的に英文を読むことでき，読解力が高まるだろう。

・英文の内容を図示したグラフィックオーガナイザーを用いて要点の整理をさせる。

・タイトルを見て内容を予測させる。
・場面や登場人物の心情を想像しながら読ませる。
・視覚補助教材（図表，イラストなど）を活用して内容を把握させる。
・ペアワーク，グループワークによる協同学習で，段落ごとまたは全文の概要をまとめさせる（ジグソーリーディング，ランニングディクテーションなど）。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回授業改善アンケート（１２月実施：回答者数 61）

１．あなたは英語の学習が好きですか。＊無回答１

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
14 人（23%）	28 人（46%）	13 人（21%）	5 人（ 8%）

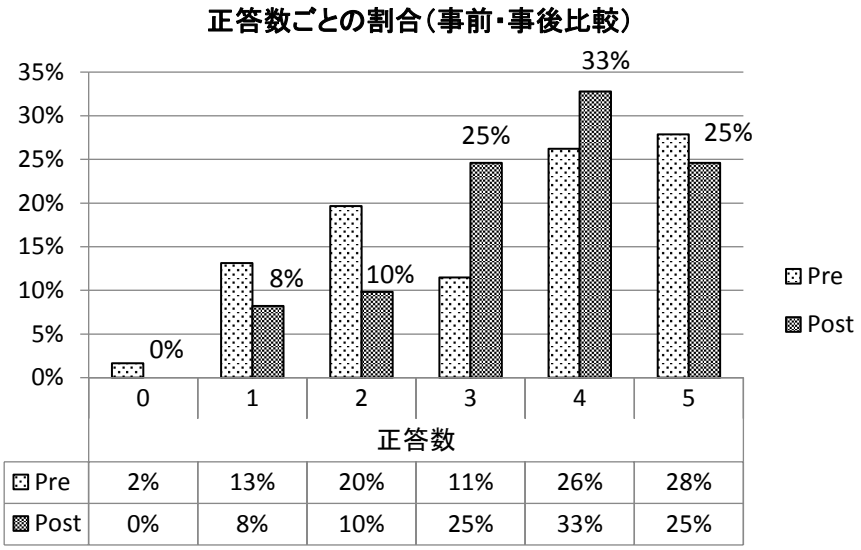
２．今までの授業で読んだ英文の内容を理解できていましたか。＊無回答１

理解できていた	まあまあ 理解できていた	あまり 理解できていなかった	まったく 理解できなかった。
10 人（16%）	39 人（64%）	8 人（13%）	3 人（ 5%）

９月のアンケートと比較すると，英語の学習が「好き」または「どちらかといえば好き」と回答した生徒の割合は 55%から 69%に増加した。授業で読んだ英文を「理解できていた」とする生徒は 64%から 80%にまで達した。プレリーディング活動を工夫したことで，生徒が，英文内容をより身近なものに感じながら，主体的に読解することができるようになったと考えられる。また，ペアワークやグループワークによる協同学習では，理解できない部分を補い合いながらあきらめずに読み進めようとする姿勢が見られるようになった。

・第２回英検３級テスト(１２月実施：受験者数 61)

正解数	0 問	1 問	2 問	3 問	4 問	5 問
人数	0 人	5 人	6 人	15 人	20 人	15 人



事前テストと同等レベルの英文読解問題を使用した。英検合格の目安である 5 問中 3 問以上正解した生徒は 40 人(66%)から 50 人(80%)に増加しており，改善の目安に達した。しかし各設問の正答率は(1)～(4)のパラグラフの要点を問う問題よりも，(5)の英文全体の概要を問う問題の方が低く，第 1 回と第 2 回の変化は 38%から 41%とほぼ横ばいであった。今後も概要把握を意識した指導や練習が必要であると感じた。

教師の変化

授業中に行う活動について，何のために行うのか教師の意図することを丁寧に説明するようになった。今回の研究に関しても，その目的を説明したところ，生徒が意欲的に授業に参加し，読解問題に未知語があっても最後まで粘り強く取り組んでいた。英検問題による読解テストの結果を知らせると，予想以上に多くの生徒から「英検を受けてみたい」という声が上がった。生徒の英語学習に対する関心をさらに高めながら，自らの授業力の向上にも励みたいとあらためて思った。

今後の課題（次の改善点など）

・プレテスト，ポストテストの両方のテストを受けた 61 人を上位層と下位層に分け，その変化など多角的に分析することで，より詳細に生徒のニーズを把握したい。
・英文のトピックが変わっても同様の結果が表れるかどうか，研究を引き続き行い，安定した概要把握の力を身につけさせたい。
・オーラルイントロダクションを実施するともに，教師から簡単な質問を投げかけ，生徒とのインタラクションを心がけたが，生徒の英語表現に関しては課題が見られたため，スピーキング活動やライティング活動も充実させながら，発信力を育成していきたい。
・生徒の興味を引きつけたり，取組状況に臨機応変に対応したりするための指導技術や活動などの引き出しを増やしたい。

まとめ・感想

この研修中に学んだことは，過去の受講者の感想にも多かった，「アクション・リサーチはラブストーリーだ」ということである。今回取り組んだ課題研究は，過去に何度か実施したが，数値的な結果のみを求めていて，失敗からの原因究明の大切さについては深く考えてこなかった。授業は生き物なので，失敗することも多い。実際に目の前にいる生徒のことを考えて日々の授業の課題を解決する姿勢を忘れてはいけないと思った。研究の結果を聞いた生徒たちの少し満足そうな笑顔が忘れられない。

授業改善にあたって参考にした資料等

小池生夫・寺内正典・木下耕児・成田真澄(編著).(2004).『第二言語習得研究の現在』大修館書店
JACET SLA 研究会(編著).(2013).『第二言語習得と英語科教育法』開拓社

予習を前提としない，リーディングスキルを育成する授業

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 3 クラス，合計 120 名（男子 60 名，女子 60 名）の生徒である。英語の学習に非常に意欲的な生徒が多く，ペアワークやグループワーク等にも積極的に取り組むことができる。ほとんどの生徒が大学への進学を希望しており，高校２年生の前期の段階で大学受験を意識した勉強を始めている生徒も多い。傾向としては，理系学部への進学希望者が多い。

解決すべき課題

読解の際，未知の内容や，未習の単語について推測しながら概要や要点，論理展開を的確に読み取る力をつけてほしいと考えている。しかし現状の授業では，予習をしっかりさせ，学習事項を定着させることがおもな目的になってしまっており，初見の英文を自分の力で読む力を身につけさせる指導ができていない。単語の意味がわからないと文章を読み進めることができないと考える生徒が多く，授業を通じて，未知語にとらわれずに読む力を身につけさせることが課題である。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回アンケート（６月実施：回答者数 114）

１．現在の授業で読む力が身についていると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
11 人（ 9.6%）	69 人（60.5%）	29 人（25.4%）	5 人（ 4.4%）

２．この授業で英語を読んで概要・要旨をとらえる力が身についていると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
14 人（12.3%）	67 人（58.8%）	30 人（26.3%）	3 人（ 2.6%）

３．この授業で未知語を推測する力が身についていると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
17 人（14.9%）	39 人（34.2%）	50 人（43.9%）	8 人（ 7.0%）

現在の授業で読む力が「(どちらかといえば）身についている」と感じている生徒が約 7 割で，概要・要点の読解というサブスキルについても，同様におよそ 7 割が「身についている」と回答した。しかし，これまでは，予習として辞書を使って日本語訳をさせてきたため，初見の英文を読んだとき

の「読む力」「概要・要点をとらえる力」を生徒が正当に自己評価できたとはいえない。一方，未知語を推測する力については，半数の生徒が「身についていない」と感じていることがわかった。

・第１回英検２級長文問題テスト（６月実施：受験者数 114）

トピック：「手書き」のよさについて

※Q.1～4 は既存の要点問題，Q.5 は自作の概要問題

	Q.1	Q.2	Q.3	Q.4	Q.5
正答人数（人）	101	104	84	78	83
正答率（%）	88.6	91.2	73.7	68.4	72.8

Q．英検の文章問題を解いてみて難しかったですか。

はい	37 人（32.5%）
いいえ	77 人（67.5%）

要点問題の平均正答率は 80.5%，概要問題の正答率はやや低く 72.8%であった。結果は決して悪くないが，テスト直後のアンケートで「難しかった」という生徒が 3 割以上おり，自信を持って正答できたわけではない生徒もいたと予想された。また，難しかった理由として「単語の意味がわからない」と答えた者が 37 名中 27 名いた。これらのデータから，英文を読む際に「単語がわからないと読めない」と感じている者が多くいることがあらためてわかった。やはりこの授業で，未知語に出会っても概要や要点を的確に読み取ることができる力を育成することが必要であるということを再認識した。

リサーチ・クエスチョン

初見の英文を読んで，未知語にとらわれずに内容を的確に理解する力を身につけさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・予習を前提としない読解の授業で「読解力が身についている」と感じる生徒が 7 割を超える。

・未知語の意味を推測できるようになったと感じる生徒が 7 割を超える。

改善のための手だて

○ 意味を与える語を厳選して，初見の英文読解に取り組ませれば，未知語を推測させながら読み進める力が身につくようになるだろう。

・予習を前提とせず，授業のなかで教科書の英文を読解させる。

・トピック関連の低頻出語や読解に著しく支障をきたすと思われる語については，読む前に意味を与えておく。

○ 初見の英文の概要や要点，論理展開を読み取るタスクを与えれば，詳細にとらわれることなく，自分の力で内容を理解できるようになるだろう。

・グラフィックオーガナイザーを与えて，内容を整理させる。

・確実な理解を促すために，直訳ではなく自分で考えた日本語で記入させる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回アンケート（１２月実施：回答者数 112）

１．現在の授業で読む力が身についていると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
10 人（ 8.9%）	69 人（61.6%）	27 人（24.1%）	6 人（ 5.4%）

２．この授業で英語を読んで概要・要旨をとらえる力が身についていると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
11 人（ 9.8%）	71 人（63.4%）	24 人（21.4%）	6 人（ 5.4%）

３．この授業で未知語を推測する力が身についていると思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
13 人（11.6%）	48 人（42.9%）	42 人（37.5%）	9 人（ 8.0%）

予習を前提としない英文読解の指導・活動を行ったあとでも，「読む力が身についている」「概要・要旨をとらえる力が身についている」と回答した生徒はそれぞれ 7 割強になり，改善の目安に達した。未知語を推測する力が身についたという生徒は，改善の目安であった 7 割には届かなかったが，６月の 49.1%から 54.5%に増加した。ある程度の手応えが感じられてきているので，指導を継続していきたい。

・第２回英検２級長文問題テスト（１２月実施：受験者数 106）

トピック：「アメリカシロヅル」について

※Q.1～4 は既存の要点問題，Q.5 は自作の概要問題

	Q.1	Q.2	Q.3	Q.4	Q.5
正答人数（人）	97	65	74	84	73
正答率（%）	91.5	61.3	69.8	79.2	68.9

Q．英検の文章問題を解いてみて難しかったですか。

はい	34（32.1%）
いいえ	72（67.9%）

要点問題の平均正答率，概要問題の正答率とも少し下がってしまった（それぞれ 75.5%，68.9%）。これは英文のトピックが生徒にとってあまり身近なものでなかったことに起因しているかもしれない。実施直後のアンケートでは，まだ 3 割以上の生徒が長文読解に難しさを感じている。難しいと感じた理由として， 33 名中 20 名の生徒がやはり「単語がわからない」ことを挙げていた。今後も授業を通して，未知語にとらわれず読み進めるスキルを育成することが重要であると感じている。また第 2 回でも概要問題の正答率の方が低いことから，英文のメインアイディアやメッセージをつかむリーディングタスクを，今後の授業でも引き続き扱っていく必要があると思う。

教師の変化

自分自身，予習を前提としない授業をすることに当初は大変抵抗があり，自学自習の習慣がなくなってしまうのではないかと心配をしていた。しかし，いざ予習をなくしてみると，思っていた以上に授業に対する生徒の集中力は高まり，「英文を読むことがおもしろい」という声が聞こえてくるようになった。また，各自で初見の英文を読む時間に，読解が困難な箇所について周囲と相談する生徒も出始め，この活動が生徒同士の学び合いのとても貴重な機会となっていることに気づかされた。これまでの自分の授業は，いかに知識や説明を与え過ぎて，生徒自らが学ぶ機会を奪ってしまっていたかと反省させられた。また，授業内で説明や板書をする時間を減らした分，英語が苦手な生徒や質問がある生徒に対する個別指導に，より多くの時間を割くことができている。

今後の課題（次の改善点など）

・グラフィックオーガナイザーをより効果的なものにしていく。（特に，「穴埋め訳読」のようにならないよう注意する。）
・補助を減らすなど，グラフィックオーガナイザーの難易度を段階的に上げながら，最終的には生徒が自力で概要を読み取れるようにする。
・未知語の意味を文脈より推測させる活動を充実させる。
・要約文や意見文を書かせるなど，読解内容に基づいたアウトプット活動を充実させる。

まとめ・感想

今回の研修を通して一番変化したのは自分自身である。まず，アクション・リサーチを通して，生徒のどのような力を伸ばす必要があるのかを客観的に把握することができたため，授業の目的がとても明確になった。また，研修で学んだ活動をいくつか授業で実践してみたところ，同じ学習内容であっても，提示のしかたや活動の違いで生徒の反応はこんなにも変化するものなのだと実感することができた。現在，少しずつではあるが生徒の授業に対する取組が変化してきたように感じている。何より，この研修を通して，英語を教えるということの奥深さとおもしろさ，そして楽しさをたくさん教えていただいた。この機会に自分自身が学び感じたことを胸に，今後も日々研さんに努めていきたい。最後に，今回の研修でご指導をいただいたアカデミアの先生方，そして，一緒に参加した他校の先生方に心から感謝を申し上げたい。

主体的な学びによる読解力の向上を目指した授業

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は３学年３クラス 111 名（男子 60 名，女子 51 名）で，英語への興味・関心が高く，基礎力を持つ生徒と，そうでない生徒が混在している。学年全体の概ね９割の生徒が大学・短大・専門学校に進学するが，AO 入試や指定校・推薦入試によるものがほとんどである。授業中の態度はまじめであり，教師からの指示にはよく従う。

解決すべき課題

・まじめに授業を聞くが，学習態度は基本的に受け身である。授業が教師主導になりがちであり，主体的な学びの場面が多いとはいえない。
・基礎的な語彙力や文法知識が不足しており，英文を読むことに苦手意識を持つ生徒が多い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回授業改善アンケート（６月実施：回答者数 105）

１．あなたはこの授業（コミュニケーション英語Ⅲ）を楽しいと思いますか。

思う	まあ思う	あまり思わない	思わない
41 人（39.0%）	43 人（41.0%）	17 人（16.2%）	4 人（ 3.8%）

２．あなたは授業に対して，自ら積極的に取り組めていると思いますか。

思う	まあ思う	あまり思わない	思わない
21 人（20.0%）	55 人（52.4%）	27 人（25.7%）	2 人（ 1.9%）

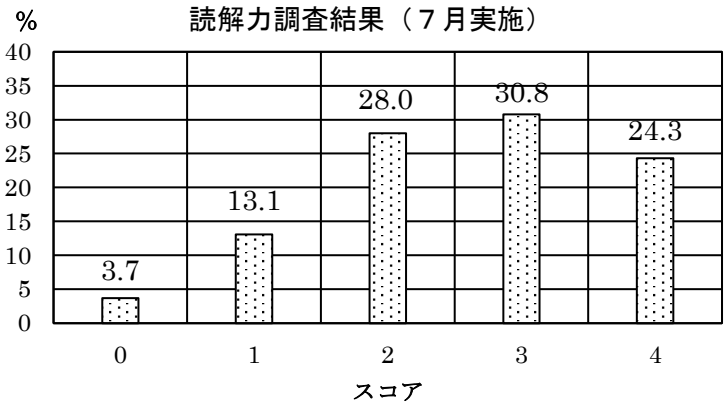
３．あなたはこの授業でどのような力を一番伸ばしたいと思っていますか。

聞く力	読む力	話す力	書く力
14 人（13.3%）	43 人（41.0%）	32 人（30.5%）	16 人（15.2%）

４．あなたは「英文を読む」ことに自信がありますか。

ある	まあある	あまりない	ない
3 人（ 2.9%）	21 人（20.0%）	52 人（49.5%）	29 人（27.6%）

・第１回読解力調査（７月実施：受験者数 107）



7 割以上の生徒が楽しく積極的に授業に参加できていると感じていた。しかし授業中の様子を見ると，この結果と実際の状況には大きなギャップがあるように感じられた。多くの生徒は文法訳読式の授業に慣れており，受動的な時間に心地よさを感じているようであった。また，読解力を伸ばしたいと考えている生徒が多い一方で，8 割近くは英文を読むことに自信がないことがわかった。英検準２級の読解問題（設問 4 問：1 問 1 点）を使って生徒の読解力を調べたところ，合格の目安となる正答率 60%以上（ここでは 3 点＝75%以上）の生徒の割合は 55.1%だった。これらのことから，授業に参加している充実感も向上させつつ，実質的な主体的学びを促すことで，読解力を伸ばすことができないかと考えた。

<u>リサーチ・クエスチョン</u>

生徒が主体的に授業に取り組むと同時に，短い英文の概要を自力で理解することができるようになるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・「コミュニケーション英語Ⅲの授業に自ら積極的に取り組んでいる」と回答する生徒の割合が全体の 8 割を超える。

・英検準２級の読解問題で正答率 75%以上の生徒が全体の 6 割を超える。

<u>改善のための手だて</u>

○ 授業の進め方を工夫し，生徒が主体的に英語を使用する場面を増やせば，意欲的に授業に参加するようになるだろう。

・Pre-reading, While-reading, Post-reading の活動を充実させる。

＜実際の指導の流れ＞

Pre-reading　：　オーラルイントロダクション，トピック関連画像などによるスキーマの活性化

While-reading　：　予習を前提としない，教科書英文の読解

Post-reading　：　内容理解確認の Q&A，暗唱・音読，重要構文を使った自由英作文，内容に関連したリスニング活動，教科書語彙・フレーズの復習テスト，など

・ペアワークを多く取り入れる（上記の活動も原則的にペアで行わせる）。

・学習意欲の維持向上のための評価方法を工夫する（課題・小テスト対象のポイントカード制）。

○ ワークシートの構成を工夫し，読解の目的をより明確にすれば，短い英文の概要を読み取る力が身につくだろう。

・ワークシートに必ず本文の概要を問う T/F 問題を設定し，概要をつかむ練習をさせる。
・グラフィックオーガナイザーを用いた内容理解に取り組ませることで「木から森へ」（詳細から全体へ）の読みかたではなく「森から木へ」（全体から詳細へ）の読みかたを意識させる。

○ 継続的なリーディング活動を行い，概要を理解するタスクに取り組ませれば，英文を読むことへの抵抗感が減り，読解力の伸びを実感させることができるだろう。
・教科書英文以外の 100 語から 200 語の英文を用意し，帯活動として定期的に取り組ませる。
（英文を制限時間内で読む⇒概要問題に答える⇒かかった時間・得点を記録する）

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回授業改善アンケート（１２月実施：回答者数 95）

１．あなたはこの授業（コミュニケーション英語Ⅲ）を楽しいと思いますか。

思う	まあ思う	あまり思わない	思わない
21 人（22.1%）	59 人（62.1%）	13 人（13.7%）	2 人（ 2.1%）

２．あなたは授業に対して自ら積極的に取り組めていると思いますか。

思う	まあ思う	あまり思わない	思わない
18 人（18.9%）	62 人（65.3%）	14 人（14.7%）	1 人（ 1.1%）

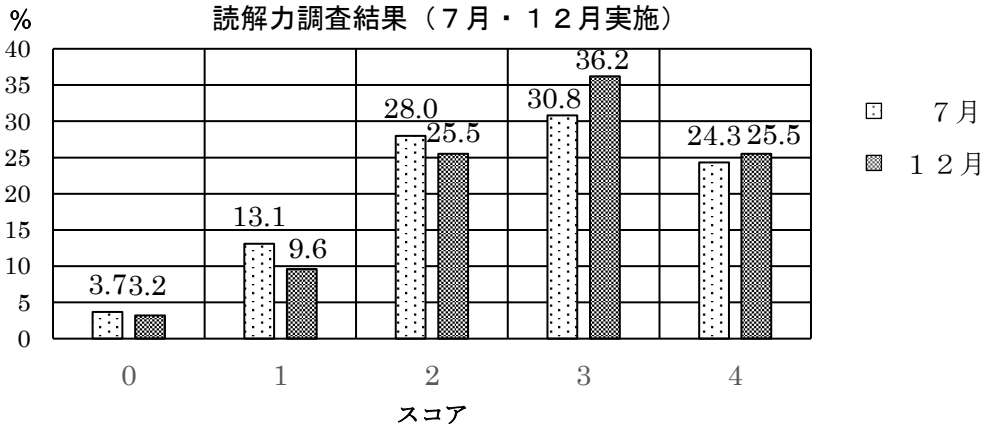
３．あなたは「英文を読む」ことに自信がありますか。

ある	まあある	あまりない	ない
3 人（ 3.2%）	19 人（20.0%）	44 人（46.3%）	29 人（30.5%）

４．英文を読む際に，あなたはどのようなことを意識していますか（自由記述）。

生徒のおもなコメント（すべて原文のまま）	
・大まかに内容を理解する	・大切な文を見つけ，そこを読み取る
・わからない単語が出てきても止まらない	・要点を探す
・話の全体を理解しようとする	・英文の内容を簡単に要約しながら読む

・ **読解力調査の結果比較（７月：受験者数 107　１２月：受験者数 95）**



「授業が楽しい」「積極的に参加できている」と思う生徒の割合はいずれも増加した。とりわけ授業に積極的に参加したという生徒は 10%以上増加し，改善の目安に達した。一方，「英文を読むこと

に（まあまあ）自信がある」と回答した生徒の増加率はごくわずかなものであった（22.9% → 23.2%）。これについては，リーディングの帯活動の頻度および内容が不十分であったことが原因と考えられる。定期試験の範囲を終わらせるのを優先せざるを得ないこともあり，活動を十分に行うことができなかった。また，英文のレベルが高過ぎることがたまにあり，自信を失わせてしまったのかもしれない。読解力調査に関しては，正答率 75%以上の生徒は，55.1%から 61.7%まで増加し，改善の目安に達した。しかし，両方のデータがそろっている生徒の伸びを Wilcoxon の符号付き順位検定で検定したところ，平均は上がっているが統計学的に有意な向上は認められなかった（$p = 0.63 > 0.05$）。300～400 語の英検準２級の英文を読み解く力を身につけさせるには，100 語から 200 語の読解トレーニングでは不十分だったのかもしれない。また，英検合格正答率の 60%を意識しながらも，調査の設問数が 4 問であったため，適切な目標設定ができていなかったことも大きな反省点である。5 問で行っていれば，より精緻に生徒の伸びや課題をつまびらかにできただろう。統計学的に有意な読解力の向上は認められなかったものの，事後アンケートの自由記述に「英文を読む際に意識していること」として，概要・要点の把握や未知語の推測にかかわる言及が多く見られたことは注目すべきである。今回の授業改善の結果，生徒は文法訳読式でない英文読解を意識できるようになったと言ってよいだろう。

教師の変化

・生徒の主体的な活動時間を増やすよう，授業の進め方を工夫するようになった。
・一つひとつの活動や授業に，明確な目的や目標を持つようになった。また，目標に基づいて継続的に指導をしていくよう心がけるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・言語活動のさらなる充実
　言語活動の時間を増やすようにはなったものの，依然として教師による説明の時間が長い。生徒の主体的な活動をさらに工夫していく必要がある。
・基礎的な語彙力，文法知識が不足している生徒への対応
　英文を自力で読ませるには，基礎的な語彙力や文法知識は必須である。スキルの向上を中心とした授業を展開しながらも，それを支える言語知識を体系的に指導し，身につけさせなければならない。
・継続的リーディング活動の効果的な実施
　生徒の発達段階を見極めながら，より適切なレベルの英文読解活動を，より計画的に行っていく必要がある。

まとめ・感想

授業改善の目標を定め，具体的な解決策に落とし込んでいくという作業は，私にとってはじめはとても難しいものだった。それもひとえに，これまでの私はそのように体系的な指導計画を立てたことがなかったからである。「なんとなく」の目標と「なんとなく」の指導計画で「なんとなく」英語を教えてきた。それが今までの私の指導だった。しかし，今回の研修を通して，生徒のニーズに基づいた具体的な目標を定め，その目標を達成するための論理的で十分な指導計画を練ることの大切さを学ぶことができた。今後はこの機会に学んだことを忘れずに，しっかりとした指導計画を立てることを心がけたい。

日本語訳に頼らない英文読解の指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学 年	2	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 3 クラス，合計 121 名（男子 61 名，女子 60 名）の生徒で，文系・理系選択が半数ずつである。ほぼ全員が 4 年制大学への進学を希望しており，基礎学力は非常に高く勉強に対して熱心である。授業中の態度も良好で，ペアワーク，グループワーク，音読などに積極的に取り組む生徒が多い。ただし，9 割以上の生徒が部活動に所属しているため，勉強と部活の両立を課題として挙げている生徒も多く，応用的な言語活動やテストに弱い傾向がある。

解決すべき課題

１年次から予習として教科書の本文を事前に和訳してくることを求めていたが，1 文ずつの構造を把握したり，日本語に直して内容を理解したりすることには慣れたものの，英文を日本語に変換せずに読み進めて内容を理解することや，文章全体のメッセージをとらえることができていない。また，未知語に出会うたびに意味調べをするため，そこで読みが止まってしまうような生徒も多い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回英検２級テストの結果（７月実施：受験者数 113）

まとまった初見の英文を読み取る力がどのくらい身についているのかを調べるために，英検２級の読解問題（設問 5 問）を出題した。第５問を「この文章のなかで筆者がもっとも言いたいことは何か」という概要を問う問題に変更し，英文の要点とともに概要の理解も確認できるようにした。多くの生徒が４年制大学の難関校を志望しているため，合格ラインとなる正答率 6 割よりさらに高い 8 割以上の正答率を目標にすることにした。読解および設問回答に要した時間（最大 15 分）も記録させ，得点とともに平均値を算出した。

得点平均	平均所要時間	8 割以上の正答率
3.3 点	10.4 分	44 人（38.9%）

全体の正答率はほぼ合格ラインの 66.0%（得点平均 3.3 点）で，正答率 8 割以上の生徒は，38.9%で半数にも届いていなかった。所要時間の平均も，英文の長さを考えるとややかかり過ぎという印象があった。

・第１回アンケート（７月実施：回答者数 119）

【質問項目】

① 英文を読むとき，頭のなかですぐに日本語に訳そうとしていますか。

② 英文を読むとき，うまく日本語訳ができないと不安になりますか。

③ 英語の文章を読んで「この文章で筆者が一番言いたいことは何か，一言で答えなさい」と問われたら，自信を持って答えることができますか。

質問	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
①	44.1%	37.3%	16.1%	2.5%
②	31.1%	39.5%	26.9%	2.5%
③	0.8%	22.7%	52.9%	23.5%

日本語を介して英文を理解していると自覚している生徒は８割以上（44.1%＋37.3%），日本語訳への依存が強いと思われる生徒も 7 割以上（31.1%＋39.5%）いることがわかった。また，英文のメインメッセージをとらえる力を自覚している生徒は２割強にとどまっていた（0.8%＋22.7%）。

リサーチ・クエスチョン

日本語訳を介さずに，英文の概要や要点をより速く読み取る力を身につけさせるには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：

・英検２級の長文問題で設問正答率８割以上の生徒が全体の６割以上になる。

・英文読解の際に日本語訳に依存する生徒が５割以下になる。

・自信を持って英文のメインメッセージを読み取れるという生徒が６割以上になる。

改善のための手だて

○ 日本語訳の予習をさせずに，授業のなかで教科書本文を初見の英文として読ませれば，自分の力で読解する力が身につくだろう。

・予習項目を限定する（単語の意味，難しい文構造など）。

・リーディングストラテジーを明示的に指導する（未知語の推測など）。

○ 教科書英文の読解で概要や要点を問うタスクを与えれば，日本語を介さない内容理解ができるようになるだろう。

・トピックセンテンスを探させる。

・各パラグラフの内容を日本語または英語１文でまとめさせる。

・パッセージ全体の要約を日本語または英語でさせる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回英検２級テストの結果（１２月実施：受験者数 118）

得点平均	平均所要時間	8 割以上の正答率
3.1 点	10.7 分	48 人（40.7%）

第１回に比べて，8 割以上正答した生徒の割合は少し増えたが，改善の目標には届かず，得点平均や平均所要時間においても改善が見られなかった。英文のトピックや使われている語彙が第１回よりやや難しかったことがその原因のひとつかもしれないが，指導の効果はまだ不十分であると言わざるをえないだろう。

・第２回アンケート（１２月実施：回答者数 119）と第１回アンケートの結果比較

質問①：英文を読むとき，頭のなかですぐに日本語に訳そうとしていますか。

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
７月	44.1%	37.3%	16.1%	2.5%
１２月	28.6%	40.3%	30.3%	0.8%

質問②：英文を読むとき，うまく日本語訳ができないと不安になりますか。

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
７月	31.1%	39.5%	26.9%	2.5%
１２月	20.2%	39.5%	33.6%	6.7%

質問③：英語の文章を読んで「この文章で筆者が一番言いたいことは何か，一言で答えなさい」と問われたら，自信を持って答えることができますか。

	とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
７月	0.8%	22.7%	52.9%	23.5%
１２月	3.4%	35.3%	45.4%	16.0%

「頭のなかですぐに日本語に訳そうとしている」「うまく日本語訳ができないと不安になる」という英文読解時の日本語依存について，「そう思う」という生徒は，目標の 5 割以下まで減らせなかったが，それぞれ 68.9%，59.7%にまで減少した。メインメッセージの読み取りについても，目標値には達していないが，できると自覚している生徒は 4 割弱（3.4%＋35.3%）まで増加した。日本語訳でなく，英文のままで概要・要点をとらえる読解のタスクに取り組ませてきた効果が徐々に表れていると思われるため，今後もこのような指導を継続していきたい。

教師の変化

・明確な目標を持ち，その目標に沿った言語活動やワークシートを計画，作成するようになった。
・主観的な判断ではなく，数値などの客観的な情報をもとに自分の授業をふり返るようになった。
・英語学習に特化したアンケートを実施したことで，生徒の英語に対する意識やニーズと向き合うことの大切さを再確認した。

今後の課題（次の改善点など）

・指導法や言語活動のレパートリーを増やし，英語力，学習意欲などの面で，さまざまな生徒のニーズに対応できるようにしていきたい。
・4 技能を総合的かつ統合的に伸ばしていけるような授業デザインを考えたい。
・大学入試対策だけでなく，その先を見据えた英語学習の意義を生徒に理解させ，楽しんで自律的に学び続ける意欲を与えられるような授業をしていきたい。

まとめ・感想

小さな授業改善は以前から行っていたが，目標を明確に設定し，それに向かってこれまでの授業の進め方を根本的に見直すということはこれまでしてこなかった。アンケートを取ることもここ最近なくなっていたので，この研修を通じ，生徒の英語の授業への期待や英語習得への憧れを肌で感じることができ，教師はどれだけ多くの経験を積んでいようが，つねに自分の授業をよりよいものにしようと努力する気持ちを忘れてはいけないとあらためて感じた。日本の英語教育を変えたいと強く願い，高校の英語教師を志したあの頃の気持ちを思い出させてくれた，この研修で出会った講師および他校の先生方，また協力してくれた自分の生徒たちに心から感謝し，これからもさまざまなことにチャレンジし続ける教師でありたい。

“A comfort zone is a beautiful place, but nothing ever grows there.”

授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司.(2100).『英語で英語を読む授業』研究社
田尻悟郎.(2014).『田尻悟郎の英語教科書本文－活用術！知的で楽しい活動＆トレーニング－』教育出版
瀧沢広人.(2013).『教科書を 200%活用する！英語内容理解活動＆読解テスト 55』明治図書出版

速読即解を目指したリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は 2 クラス 72 名（男子 40，女子 32）の生徒で，全員が大学・専門学校への進学を希望している。大学入試を意識して，英語を勉強する意欲はあるが，英語の成績には差がかなりある。明るい生徒もいれば，おとなしい生徒もいるが，部活動に対して大変熱心に取り組む生徒が多い。学習態度については，全体的に受け身の傾向がある。

解決すべき課題

英文読解を行うとき，1～2 年時には Q&A や T or F を用いて内容理解を進めてきたが，答えを本文中からそのまま書き写したり，単語などから当て推量で回答したりする生徒が多く，本当に理解できているのか疑問である。また，内容を理解するのに 1 文 1 文の日本語訳に頼る生徒も少なくなく，全体的に，自分の力で英文を読んで概要・要点をとらえる読解スキルが身についていない。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・英語に関する意識調査（6 月実施：回答者数 58）

生徒の英語学習への意識や興味について，アンケート調査を行った。

1．英語の学習に興味はありますか。

とても興味がある	興味がある	あまり興味がない	全然興味がない
25 人(43.1%)	26 人(44.8%)	5 人(8.6%)	2 人(3.4%)

2．もっとも伸ばしたいスキルは何ですか。

聞く	書く	読む	話す
5 人(8.6%)	17 人(29.3%)	26 人(44.8%)	10 人(17.2%)

3．読むことは得意ですか。

とても得意	得意	あまり得意ではない	不得意
2 人(3.4%)	9 人(15.5%)	35 人(60.3%)	12 人(20.7%)

英語学習自体に関心を持っている生徒の割合は高い。4 技能のうち，もっとも伸ばしたいのは読解のスキルである。しかし，読解への自信はあまり持っていない。思っていたより，他スキルも磨きたいと考えている生徒もいるので，リーディングに重点を置きながら，4 技能の総合的・統合的指導を意識した授業を行っていく必要があるとあらためて感じた。

・英文読解テスト（９月：受験者数 55）

大学入試センター試験の第６問（説明文）を用い，18 分の解答時間で問題を解かせた。満点を 10 点とし，平均は 10 点満点の 6.1 点であった。半数の生徒が 7 割以上正答している一方で，正答率 3 割以下の生徒が 2 割以上いた。

点数	0～3 点	4～6 点	7～10 点
人数(%)	12 人(21.8%)	15 人(27.3%)	28 人(50.9%)

リサーチ・クエスチョン

まとまりのある長めの英文を読み，概要や要点，論理展開を，限られた時間内に，自力で理解できるようにするには，どのような指導をすればよいか。

改善の目安：大学入試センター試験の長文問題（第６問：10 点満点）を読み，7 割以上正解する生徒が，全体の 6 割を超える。

改善のための手だて

○ 時間を計測して速読練習をさせれば，限られた時間で自分の力で英文を読むことに慣れるだろう。

・速読教材を用いて１週間に１回速読練習をし，結果を記録していく。

○ 英文の概要や要点，論理展開を問うタスクを与えれば，より的確な内容理解ができるようになるだろう。

・パラグラフリーディングを指導する（トピックセンテンス，ディスコースマーカーなど）。

・読解のためのワークシート（グラフィックオーガナイザー）を指針として読解練習を行う。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・英文読解テスト（１１月：受験者数 55）

９月と同じ条件で，大学入試センター試験第６問（説明文）の異なる英文を用いテストを実施した。平均値は，6.4 点となり，上昇が見られたものの，7 割以上正解した生徒は全体の 56.4%で，6 割には満たなかった。また，個々の生徒の伸びについて t 検定（対応のあるデータ）を行ったところ，有意差は認められなかった（$p = 0.39 > 0.05$）。目標に達しなかった原因としては，読解に必要な語彙知識が不足しているうえに，未知語を推測しながら読み進めるなどの方略を使うことができない生徒が多かったことが考えられる。１年時から基礎力を着実に身につけさせ，早くからリーディングストラテジーの指導を行っていく必要があると感じた。

点数	0～3 点	4～6 点	7～10 点
人数(%)	8 人(14.5%)	16 人(29.1%)	31 人(56.4%)

習熟度別の生徒の変化を見るために，それぞれ平均値±1 標準偏差を区切りとして，上位・中位・下位グループに分けてそれぞれの平均値を比較したところ，特に下位グループの向上が大きく，得点の底上げができたことが推察された。

上位グループ平均	9.5
中位グループ平均	6.3
下位グループ平均	1.8

上位グループ平均	9.3
中位グループ平均	↑6.6
下位グループ平均	↑2.7

・速読練習の効果

９月から１１月まで, 合計 10 回の速読活動での WPM（=words per minute：１分間に読めた語数）を記録・提出させた。WPM の記録が 7 回以上そろっている 28 名について分析を行ったところ，平均は 89.3 語で，そのうち 100 語を超えた生徒は 8 名だった。７回目～１０回目（実施後期）の平均 WPM が初回よりも上がっている生徒は，19 名いたことから，この活動は，読解速度を高めるうえで有効であったと思われる。一方で, 実施後期の平均速度が, 初回の速度より低かった生徒は 5 名いた。原因として，生徒によって英文トピックの親和性が異なり，背景知識をうまく活用できないことがあったということが推測できる。実際，WPM の記録時に，「今日はとてもよく読めた」「難しかった」「間に合わなかった」などの声が上がっていた。

・英語に関する意識調査(１１月実施：回答者数 57)

１．１学期またはそれ以前と比べ，英文を読むことに自信がありますか。

とても自信がある	自信がある	あまり自信がない	全然自信がない
10 人(17.5%)	33 人(57.9%)	9 人(15.8%)	5 人(8.8%)

２．１学期またはそれ以前と比べ，英文読解のしかたはわかるようになっていますか。

よくわかっている	わかっている	わからない	全然わからない
7 人(12.3%)	40 人(70.2%)	6 人(10.5%)	4 人(7.0%)

３．１学期またはそれ以前と比べ，速く読めるようになっていますか。

強くそう思う	そう思う	そう思わない	全然そう思わない
12 人(21.1%)	33 人(57.9%)	9 人(15.8%)	3 人(5.3%)

４．グラフィックオーガナイザーは，英文全体の内容や論点を理解するのに役に立っていますか。

とても役に立つ	役に立つ	役に立たない	全然役に立たない
3 人(5.3%)	43 人(75.4%)	10 人(17.5%)	1 人(1.8%)

以前に比べて英文を読むことに「自信がある」という生徒が 75%を超えている。おそらく，英文読解のしかたを指導し，進歩を確認させながら速読練習を継続したことが，有効に働いた結果と思われる。３年２学期から導入したグラフィックオーガナイザーについては，当初は戸惑いが見られたものの，回を重ねるごとに，配布すると熱心に見入って意欲的にタスクに取り組むようになっていった。アンケートでも 8 割以上の生徒がグラフィックオーガナイザーは読解に役立つと回答しており，「パラグラフを意識して読むようになった」という自由記述も見られた。一方で，「空欄ばかりで何を書くのかわかりにくい」「細か過ぎるときがある」「時間内に全部埋まらない」などのコメントもあった。

教師の変化

これまで行ってきた Q&A や T or F の読解活動について, 自分自身も「本当に英文の内容を理解させ, その理解を確認するための活動になっているのだろうか」という疑問を持っていた。今回の研修とリサ

ーチを通し，タスク（グラフィックオーガナイザーや要点を確認する Q&A）を作成するときに，何を読み取らせたいのか考えるようになった。テキストをより深く吟味し，読解の目的を明確に設定できるようになった。また，個々の生徒のワークシートへの取組状況を注意して観察することで，ワークシートの構造・内容も改善できるようになった。事前・事後のアンケート調査やテストのデータにより，生徒の意識や伸びを，感覚だけでなく，客観的に見ることができ，自信にもつながった。生徒が読解以外のスキルに関しても伸ばす意欲を持っているということが，数値から明確になったことで，授業のなかにさまざまなスキルにかかわる活動を組み込んでいこうという気持ちに変わった。特に，読解活動に入る前の導入のしかたを考えることができたことが大きいと思う。単に英文内容のダイジェスト版を英語で話すのではなく，生徒の生活や経験に関連したことを使った Small talk から内容の導入につなげたり，ICT を活用して内容理解につながる画像を提示して会話活動を行ったりした。生徒の反応も徐々によくなり，主体的に読もうとする態度が見られるようになってきたと思う。

今後の課題（次の改善点など）

グラフィックオーガナイザーについては，読解する英文の難易度によっては，日本語だけでなく，英語でもまとめられるようなチャレンジもさせたい。また，ポストリーディング活動として，オーガナイザーをもとに，感想・意見を交えたオーラルサマリーの活動を導入するなどして生徒の英語運用能力も高めていく必要がある。このリサーチでは，わずか 3 か月の変化を見取るにとどまってしまったが，より長期的・計画的な授業改善が，より確実な生徒のスキルアップにつながるだろう。

まとめ・感想

進学を希望する生徒にとって，受験はかなりのプレッシャーではあるが，実は英語学習においては，生徒の大きな動機となり，指導する側としては，ひとつのチャンスになることがわかった。一方で，この意欲的な状態が，１～２年で表出していれば，３年時にできるようになることも変わってきていのではないかと感じている。今回の取組を踏まえ，CAN-DO リストを見直し，到達目標に基づいた指導計画や言語活動，授業のデザインについて再考したいと思う。このように考えられるのも，本研修で，講師の方々の現場への深い理解と熱い思い，それを裏打ちする知識と経験を毎回ご教授いただけたからである。このような機会を得られたことに心から感謝している。

授業改善にあたって参考にした資料等

卯城祐司(編著).(2009).『英語リーディングの科学―「読めたつもり」の謎を解く―』研究社
門田修平・野呂忠司・氏木道人(編著).(2010).『英語リーディング指導ハンドブック』大修館書店
卯城祐司(編著).(2011).『英語で英語を読む授業』研究社

スキルを育てるプレリーディング活動と読解タスクの工夫

科目名	応用英語	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は１クラス 23 名（男子 7 名，女子 16 名）の生徒である。クラスの雰囲気は落ち着いている。英語学習に対する意識は高く，今よりも英語力を高めたいという意欲を持っている。自ら積極的に質問をしてくる生徒は少ないものの，コミュニケーション活動には前向きに取り組む。週 3 回の授業で長文読解演習と文法・語法演習を行っている。ほとんどの生徒が 4 年制大学または短期大学への進学を希望している。

解決すべき課題

自分の力で英文の概要や要点を読み取れるようになってほしいが，長文読解に対して抵抗感があり，語彙や文法知識の不足から，わからない語や表現があると読み進められない生徒が多い。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・第１回授業アンケート（４月実施：回答人数 23）

１．英語は好きですか。

好き	まあまあ好き	どちらでもない	あまり好きでない	嫌い
11 人（47.8%）	4 人（17.4%）	2 人（ 8.7%）	5 人（21.7%）	1 人（ 4.3%）

２．応用英語を選択した理由を教えてください（自由記述）。また，次のうち特にどの力を身につけたいですか。

理由（自由記述）[人数]：

受験で使う[8]，英語が好きで興味がある[7]，苦手を克服したい[6]，英語力を伸ばしたい[4]，将来に活かせるようにしたい[4]，嫌いな英語を少しでも好きになりたい[2]

身につけたい力（複数回答可）

読む力	書く力	話す力	聞く力
17 人（73.9%）	8 人（34.8%）	4 人（17.4%）	3 人（13.0%）

英語が好きである生徒が多数を占めるが，苦手意識からか英語が好きではない生徒が 4 分の 1 程度いることもわかった。また，英語の好き嫌いにかかわらず，さまざまな理由から読む力を身につけたい，伸ばしたいと考えている生徒が多数いることがわかった。このような生徒の意識やニーズを踏まえながら，4 技能のうち読む技能に焦点をあてて授業改善に取り組むことにした。

・読解力測定：英検準２級の長文問題（大問５[A][B]計７問）（第１回：９月実施）

受験者数	平均点	最高点	最低点	標準偏差	合格者数(%)
23	5.4	7	3	1.25	17 (73.9%)

英検準２級の長文の内容一致選択問題（問題文の種類：E メール，説明文）を１問１点として出題した。合格の目安とされる 60%以上の正答率（ここでは７問中５問以上正解）に達している生徒は７割に達した。しかし，平均点以上を得点している生徒も，解答している際の様子や表情にもあまり余裕がなく，初見の長文を読むことに慣れていないように見受けられた。

リサーチ・クエスチョン

生徒が初見の長文に自力で意欲的に向き合い，概要や要点を読み取る力を身につけるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検準２級の長文内容一致問題を７問中５問以上正解する生徒の割合が８割を超える。

改善のための手だて

○ 予習をなくし，授業のなかで英文読解のタスクに取り組ませれば，自分の力で概要や要点を読み取れるようになるだろう。

・授業展開の変更

旧・１週の授業内容(3 時間)		新・１週の授業内容(3 時間)
長文読解演習（予習前提）	→	長文読解演習（初見）＋文法指導
文法・語法演習（予習前提）		長文読解演習（初見）＋文法指導
文法・語法演習（予習前提）		文法・語法演習（予習前提）

・長文読解の設問に加え，英文全体やパラグラフの内容を自分のことば（日本語）で要約するタスクを与える。

○ プレリーディング活動を工夫して読む準備をさせれば，長文に対する抵抗感がなくなり，意欲的に読解に向き合うようになるだろう。

・英文のテーマに関連する話題についてペアやグループで質問や意見交換をさせ，背景知識を認識させる。

・これから読む英文に使われている語と，それらと発音が似ている既習語とを聞き分けるリスニングタスクを与え，読解に必要な語彙を意識させる。

○ リーディングストラテジーを指導し，意識的に使わせるタスクを与えれば，自分の力で読み進めていけるようになるだろう。

・訳語や同意表現が載せられたリストをヒントに，文脈から未知語の意味を推測させる。

・言い換え表現を含め，文中でくり返し使われているキーワードを見つけさせる。

・各パラグラフのトピックセンテンスを見つけさせる。

・スキャニング（情報検索読み）を促すタスクや口頭での質問を与える。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回授業アンケート（１２月実施：回答人数 22）

１．英語は好きですか。

好き	まあまあ好き	どちらでもない	あまり好きでない	嫌い
12 人（54.5%）	6 人（27.3%）	3 人（13.6%）	1 人（4.5%）	0 人（0.0%）

２．この授業でどの力が伸びたと思いますか（複数回答可）。

読む力	書く力	話す力	聞く力	伸びたと思わない
17 人（77.3%）	6 人（27.3%）	6 人（27.3%）	2 人（9.1%）	0 人（0.0%）

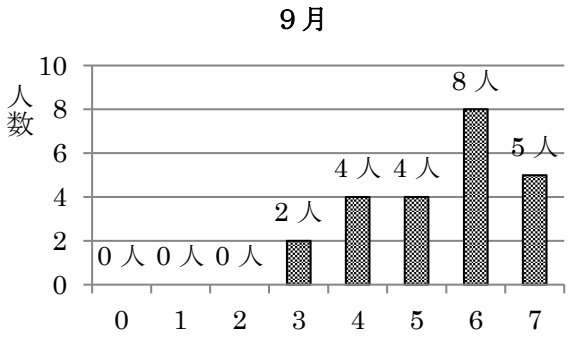
１の項目で，英語が「好き」または「まあまあ好き」と答えた生徒が 65.2%から 81.8%に増えた。また，「嫌い」という生徒がいなくなり，「あまり好きでない」と答えた生徒が 21.7%から 4.5%（1 人）に減少した。この生徒も授業の感想として「長文を読むときにどこに注目すべきかわかってきた」と述べていた。指導者としてはうれしいことばである。２の項目で，第１回のアンケートでは 53.1%（17 人）の生徒が身につけたい力として「読む力」を挙げていたが，その 17 人のうち 13 人が，第２回のアンケートで読む力が伸びたと回答していた。結果として全体の８割近くの生徒が読む力の伸びを実感できていることから，リーディングスキルに焦点を当てた今回の授業改善は効果的であったといえるだろう。授業中の様子を見ても，以前より根気よく積極的に読解に取り組めるようになっている。自由記述欄にも，多くの生徒が読む力に関するコメントを書いていた。

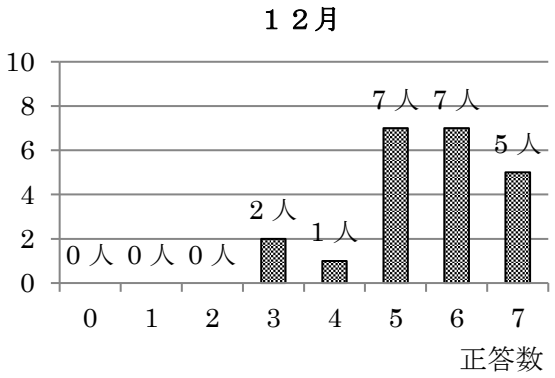
コメントの例：＊長文演習前の会話が役に立った。
＊文法や語彙の知識が長文読解に応用できている実感がある。
＊制限時間のなかで要点を読み取ることがテストでもできるようになった。
＊知らない単語があっても止まらずに読み進められた。
＊日本語訳をせずに読解問題を解く力が身についた。

また，長文読解前のプレリーディング活動においてペアワークで質問や意見交換をする機会を取り入れたことや，段落の要約や全体のまとめを考えさせる際にもペアやグループで話す機会を与えた結果，３割近くの生徒が「話す力」が伸びたと実感できていることもよい兆候である。

・読解力測定 結果比較（９月/１２月）：英検準２級の長文問題（大問５[A][B]計 7 問）

	受験者数	平均点	最大値	最小値	標準偏差	合格者数(%)
第１回	23	5.4	7	3	1.25	17 (73.9%)
第２回	22	5.5	7	3	1.16	19 (86.3%)





統計学的な有意差は認められなかったものの，平均点は微増し，「7 問中 5 問以上正解する生徒の割合が 8 割を超える」という目標は達成することができた。

教師の変化

・授業における言語活動のねらいを意識して授業計画に取り入れるようになった。授業の流れを丁寧に見直すようになった。
・生徒にも授業の目標や言語活動のねらいを提示することで，生徒とともによりよい授業をつくりたいという意欲が高まった。
・改善対象とした選択科目の授業で，必修科目での既習事項を関連づけようと工夫したことにより，科目間の指導の連携を考えるようになった。

今後の課題（次の改善点など）

・プレリーディング活動をさらに工夫し，ICT 等の効果的な活用をしていきたい。
・協同学習を促す “Think(個人)-Pair(ペア)-Share(全体)” のプロセスを言語活動にさらに取り入れながら，4 技能を効果的に伸ばしていけるような授業を設計したい。

まとめ・感想

今回，アクション・リサーチの手法を用いて授業改善をするなかで，これまで以上に個々の生徒の様子や変化に配慮しながら授業に臨むことができた。また，研修で学んだ“Think-Pair-Share”を授業内での言語活動に取り入れるなど，ちょっとした工夫を加えたことで，生徒の英語学習に対する積極性や意欲が高まったことを実感できた。この研修に参加して，毎回発見や学びがあった。研修内容はもちろんのこと，講師の方々や参加者の先生方との出会いは財産になった。今後，自身の生徒が同じように発見や学びを感じられる授業展開をしていけるよう邁進したい。

授業改善にあたって参考にした資料等

岡田圭子・ブレンダ・ハヤシ・嶋林昭治・江原美明. (2015).『基礎から学ぶ英語科教育法』松柏社
金谷憲(編著)・高山芳樹・臼倉美里・太田悦子(著). (2011).『高校英語授業を変える！訳読オンリーから抜けだす 3 つのモデル』アルク

段階的サマリーライティングの指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅰ	学 年	1	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象クラスは中学３年生の２クラス 59 名（男子 21 名，女子 38 名）である。習熟度別の発展クラスで全体的に学習意欲は高い。英語に興味関心がある生徒が多いが，生徒の英語力には差がある。

解決すべき課題

本校の生徒はプレゼンテーションやスピーチをする機会が多いため，英語を聞くことや話すことに対する苦手意識が薄く，比較的流ちょうな英語を話すことができる。しかし，ふだんの授業で英文を書かせてみると，文法の誤りが目立つ生徒が多い印象がある。これまでの生徒の傾向を考えると，この先受験する記述模試等で，話せていたはずなのに書いてみるとできていないことを実感し，自信と意欲を失う生徒が多く出てきてしまう。今のうちに正確な英文を書く力を身につけさせておく必要がある。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・アンケート調査（５月実施：回答者数 59）

英語に関する興味・関心をはじめ，どのような能力を伸ばしたいと考えているかについてアンケート調査を行った。その結果，伸ばしたい力として「英語を話す力」を挙げた生徒が 74.5%でもっとも多く，次に多かったのが「英語を書く力」で 71.1%であった。「英語を話す力」については別の学校設定科目で集中的に指導し，この授業では書く力の伸長に重点を置くことにした。

質問：今後この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（複数回答可）

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力
66.1% (39 人)	74.5% (44 人)	55.9% (33 人)	71.1% (42 人)

・第１回英文要約テスト（７月実施：受験者 59）

書く内容を自分で決める自由作文の前に，まず与えられた英文の要約文を書く力を身につけさせる必要があると考え，英検４級第４問 C の問題文の要約を書かせた。結果として，必要な情報が抜けていたり，ほぼもとの英文からの部分的な書き写しになっていたりするものが多かった。自力で作った英文には，やはり基本的な文法的な誤りが散見された。

リサーチ・クエスチョン

英文を読んで，自分のことばで要約文を書けるようにするにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：ルーブリックの各項目でＢ以上の評価となる生徒がそれぞれ全体の 70%を超える。

	内容	正確さ
A（5 点）	必要なすべての情報が適切に選択されて書かれた要約文になっている。	内容伝達に支障をきたす誤りがない。
B（3 点）	要約として必要十分な情報が含まれており，要約文になっている。	内容伝達に支障をきたす誤りが 1 つある。
C（1 点）	必要な情報が含まれてはいるが，要約が完成していない。	内容伝達に支障をきたす誤りが 2 つ以上ある。

改善のための手だて

○ 教科書のパートごとにその概要を英文で書かせる活動を与えれば，英文をまとまりとして理解する力が身につくだろう。
・英文の概要をつかむ読解タスクや質問を与える。
・S＋V の構造，時制などに気をつけて英文１文で概要をまとめさせる。

○ つなぎことばを明示的に指導し，英文のつながりを考えさせれば，まとまりのある英文を書けるようになるだろう。
・文と文をつなぐディスコースマーカーを指導する。
・各パートの要約文の関連性を考えながら段階的にレッスンサマリーに仕上げさせる。

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・第２回英文要約テストールーブリックを用いた中間測定（１１月実施：受験者 58）
英検４級第４問 C の長文問題を用いて，第１回と同形式のテストを行い，ルーブリックを用いて評価した。

	内容	正確さ
A（5 点）	18.9% (11 人)	51.7% (30 人)
B（3 点）	36.2% (21 人)	44.8% (26 人)
C（1 点）	44.8% (26 人)	3.4% (2 人)

生徒の変化として英語を書くことへの抵抗感が少なくなっている印象を受けた。パートごとの概要を英文で書かせる活動を継続してきたことで，生徒は以前より単語のスペリングや時制に気をつけて英語を書くよう意識していたようである。前回のライティングテストで多く見られた本文丸写しの要

約を避けるため，今回はもとの英文を見ずに要約文を書くよう指示した。生徒のなかには新しい方式に戸惑う者もいたが，後にこの活動が生徒の本文理解を深めるきっかけとなった。結果的に，正確さの項目で B 以上の評価となる生徒が 96.5%，内容の項目で B 以上の評価となる生徒が 55.1%であった。正確さについてはこの時点で目標に達したが，内容理解が不十分で要約文も情報不足になっていたり，読解に時間がかかり過ぎて要約文が完成しなかったりした生徒がかなり多く見られた。

・第３回英文要約テストールーブリックを用いた最終測定（１２月実施：受験者 58）

同様に，英検４級第４問 C の長文問題を用いて要約テストを行い，ルーブリックで評価した。

	内容	正確さ
A（5 点）	65.5% (38 人)	36.2% (21 人)
B（3 点）	10.3% (6 人)	50.0% (29 人)
C（1 点）	24.1% (14 人)	13.7% (8 人)

B 以上の生徒は，「正確さ」で 86.2%「内容」で 75.8%になり，改善の目標に達した。教科書レッスンの各パートの概要を読み取って英文１文で表現させる活動を継続したことが役立ったといえるだろう。

・アンケート調査（１２月実施：回答者数 58）

今後授業を通して伸ばしたい力として「英語を書く力」と回答した生徒は 84.4%で，前回の調査からさらに増えて，もっとも多くなった。授業での活動やテストによって，生徒の課題意識や達成感が高まったためと思われる。

質問：今後この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（複数回答可）

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力
32.7% (19 人)	50.0% (29 人)	62.0% (36 人)	84.4% (49 人)

また，今回新たに「この授業で伸びたと実感する力は何か」という質問項目を設けたところ，「英語を読む力」と回答した生徒が 63.7%で一番多かった。要約を書くために本文の概要をつかむ活動をくり返し行った結果，生徒は自身の読解力の向上を実感できたのかもしれない。

質問：この英語の授業で力が伸びたと実感しているものを選んでください。（複数回答可）

英語を聞く力	英語を話す力	英語を読む力	英語を書く力
31.0%(18 人)	13.7%(8 人)	63.7%(37 人)	56.8%(33 人)

教師の変化

生徒に正確な英文を書けるようになってほしいという願いから始めた今回の研究であったが，今まで取り組んだことのない発展的な活動として，正確な英文で必要な情報を伝える要約の活動を授業の柱にすることで，ライティングスキルとリーディングスキルの統合的指導を実現することができた。アクション・リサーチの手法で授業改善を行ったことで，教師にとっても生徒にとっても，活動のねらいや授業の目標が明確になり，授業が活性化された。

今後の課題（次の改善点など）

英文を多く書いたことで誤りの数も増えてしまったという生徒や，少なく書いたおかげで誤りも少なかったという生徒が見られた。流暢さが概ね高まってきたところで，パラグラフ構造を意識させる，産出させる英文の分量をコントロールする，誤りを含む文の割合で正確さを見るなど，指導や評価スケールを発展させることが必要だろう。また，英文読解と要約文をセットにして制限時間を設けたことで，読解はできていても要約文の完成に至らなかった生徒が数人いたため，よりすばやく内容を理解し，要約につながる要点整理ができる速読力を養っていきたいと思う。

まとめ・感想

今回の研修で，私は要約という自分の苦手分野を改善のための手だてとした。生徒の正確な英語ライティング能力を育みたいという思いはあったが，そのためのタスクとして要約は当初念頭にはなかった。自分が苦手とするものに手をつけることを避けていた。しかし，研修を重ねるごとに担当の先生方の豊富な知識や技術，手厚い支援のおかげで，苦手な分野にも挑戦してみようという勇気が持てるようになった。結果的に，要約活動は生徒のライティング能力を向上させただけでなく，リーディングスキルを発揮させることにもつながり，教師の教材研究が深まることで，授業も活性化できたと感じている。ライティング活動そのものは個人個人による静的な活動であるが，要約文を中心としたさまざまな統合的活動が授業をアクティブにしたと確信している。最後に，この研修の機会を与えていただいたことにあらためて感謝の意を表したい。

授業改善にあたって参考にした資料等

田畑光義・松井幸志.(2008).『パラグラフ・ライティング指導入門』大修館書店
リーパーすみ子・横川綾子.(2014).『アメリカ人なら小学校で学ぶ英文ライティング入門』アルク
吉成雄一郎・古河好幸.(2010).『英検４級合格！問題集』新星出版

ディベートを活用したパラグラフライティングの指導

科目名	英語表現Ⅱ	学 年	3	形 態	ＨＲ ・ 習熟度 ・ 小集団

クラスの特徴（男女比，雰囲気，進路など）

対象は３学年の文系２クラスと理系２クラス（男子 53 名，女子 27，計 80 名）である。授業は各クラス約 20 名で行っているため，一人ひとりの生徒に対して教師の目が行き渡りやすく，生徒が発言・質問をしやすい環境である。生徒全員が４年制大学への進学を希望しており，およそ 80%の生徒が国公立大学を第１志望としている。

解決すべき課題

自由英作文を書かせると，情報を箇条書きのように羅列するにとどまり，読み手にとってわかりやすくまとまりのある英文を書くことができない生徒が多い。英文法や語彙の知識は多いが，それらを実践的な場面で使う機会が少ないため，英語でアウトプットをしようとすると，説得力や論理性を欠いた表現になってしまう。

事前の現状把握（アンケート，テストの結果など）

・生徒のニーズ調査（７月実施：回答者数 74）

直近の学習動機として，生徒が大学入試における自由英作文問題のための対策を必要としているかどうかをアンケートで調査した。その結果，文系生徒の 68.2%が志望する大学の入試に自由英作文が出題されると回答した。理系では 27.2%にとどまっている。指定語数については，「100 語以下」が 40.0%，「120～150 語」が 48.0%，「200 語以上」が 12.0%であった。すべての生徒が大学入試のために自由英作文対策を必要としているわけではないことがわかるが，現在の文系・理系の枠組みを問わず，ある事柄について情報を整理し，自分の考えを英語で表現するというスキルは，この生徒たちにとって将来的に必ず必要になると思い，重点的に指導することにした。

・ライティングテスト（７月実施：受験者数 70）

生徒の現時点でのライティング力を知るために，GTEC for STUDENTS の練習問題を使って英作文を書かせ，「内容」「構造」「正確さ」の評価項目からなる自作のルーブリック（後述）で評価した。

問題：「近年の若者の活字離れについて，あなたの意見を書きなさい（120～150 語）。」

	内容		構造		正確さ	
	人数	%	人数	%	人数	%
A（5 点）	34	48.6	30	42.9	14	20.0
B（3 点）	27	38.6	34	48.6	28	40.0
C（1 点）	9	12.8	6	8.5	28	40.0

「内容」がAだった生徒は48.6%で，予想より多くの生徒が説得力のある自由英作文を書くことができていた。したがって，B以下の生徒に対する指導が課題だと感じた。また，「構造」では，91.5%の生徒がB以上だったため，ほとんどの生徒が形式のうえでは一応英文らしいパラグラフを書けるようになっていると判断した。評価がBであった生徒をAに引き上げるためには，結論文の工夫，すなわち英文をパラフレーズする方法をさらに指導する必要がある。「正確さ」に関しては，1パラグラフのなかで「コミュニケーションに支障をきたす誤り」が2つ以上あるC評価の生徒が40%に上った。この結果を踏まえ，「説得力があり，英文パラグラフの構造を最低限保ちながら，読み手の理解を大きくさまたげない英文を書けるようにする」こと，つまり「『内容』A・『構造』B以上・『正確さ』B以上」の評価を目標にライティング指導を計画することにした。

「『内容』A・『構造』B以上・『正確さ』B以上」となった生徒：　27人（38.6%）

（内訳）

	人数	%
AAA	10	14.3
AAB	13	18.5
ABA	2	2.9
ABB	2	2.9

リサーチ・クエスチョン

論理的で説得力のあるパラグラフを書く力を身につけさせるには，どのような指導をすればよいか。
改善の目安：ルーブリック評価で「『内容』A・『構造』B以上・『正確さ』B以上」となる生徒が全体の70%以上になる。

＜評価ルーブリック＞

	内　容	構　造	正確さ
A （5点）	内容に一貫性があり，説得力のある例や理由づけによって深められている。	「主題文－支持文－結論文」の構造が確立し，さらに結論文に工夫が見られる。	内容伝達に支障をきたす誤りがない。
B （3点）	内容に一貫性がある。	「主題文－支持文－結論文」の構造が確立している。	内容伝達に支障をきたす誤りが1か所ある。
C （1点）	内容に一貫性がない。	「主題文－支持文－結論文」の構造が確立していない。	内容伝達に支障をきたす誤りが2か所以上ある。

改善のための手だて

○ ディベート活動に基づくライティングをさせれば，論理的で説得力のある英文が書けるようになるだろう。

＜活動の手順＞

① グラフィックオーガナイザーを用いて，トピックに関する情報を整理する。

② ディベートシートに肯定側・否定側それぞれの理由とその根拠（具体例）を記入する。
（論理構成に必要となるディスコースマーカーを明示的に指導しておく）

③ 3 人組で「肯定側」「否定側」「ジャッジ」の役割を交代で担いながら，ディベートを行う。
④ プランニングのためのグラフィックオーガナイザーを活用して，ディベートトピックについて 1 パラグラフの英文を書く。

○ 書いた英文を互いに分析させれば，読み手の理解を意識することで，より正確でわかりやすい英文を書けるようになるだろう。

＜チェック項目＞

・S+V の構造が成り立っていない文があるか。
・内容伝達をさまたげる文法・語法の誤りがあるか。
・その他，理解できない文があるか。

＊ディベート&ライティング活動の題材

・「SNS は社会によい影響を与える」という考えについてどう思うか。（120～150 語）
・「親は子供に門限を課すべきだ」という考えについてどう思うか。（120～150 語）

生徒の変化（途中経過，事後の検証結果など）

・ライティングテスト（１２月実施：分析対象者数 53*）*最後まで書き上げた生徒のみ

問題：「『最近，日本では外国語を熱心に勉強している反面，母国語を大切にしない』という考えについて，あなたの意見を書きなさい（120 ～150 語）。」（GTEC for Students 練習問題より）

自作ルーブリックによる評価　＊ %の(　)は事前テスト時の割合

	内容		構造		正確さ	
	人数	%	人数	%	人数	%
A（5 点）	23	43.4 (48.6)	30	56.6 (42.9)	29	54.7 (20.0)
B（3 点）	25	47.2 (38.6)	22	41.5 (48.6)	14	26.4 (40.0)
C（1 点）	5	9.4 (12.8)	1	1.9 (8.5)	10	18.9 (40.0)

「『内容』A・『構造』B 以上・『正確さ』B 以上」となった生徒：21 人（39.6%）

（内訳）＊ %の(　)は事前テスト時の割合

	人数	%
AAA	15	28.3 (14.3)
AAB	2	3.8 (18.5)
ABA	1	1.9 (2.9)
ABB	3	5.7 (2.9)

分析対象人数に大きな差があるため，正確な比較はできないが，事後テストのルーブリック評価で「『内容』A・『構造』B 以上・『正確さ』B 以上」となった生徒の割合は 39.6%になり，７月の 38.6%から微増するにとどまった。個々の項目について見てみると，「構造」「正確さ」ではある程度の改善が認められるものの，A 評価を目指した「内容」の項目での伸び悩みが目標に至らなかった大きな原因であることがわかる。ディベート活動を「説得力のある自由英作文を書くための効果的な取組」と位置づけて指導してきたが，それが思ったように機能せず，ライティングに効果的につながらなかっ

た。「説得力の高め方」をより体系的に，そしてすべての生徒が理解できるよう，より具体的に指導すべきであった。事後テストでは特にトピックが難しいと感じている生徒が多かったようで，開始から 10 分たっても書く内容が思いつかず，結局提出できなかった生徒もいた。そのような生徒の，授業で使用したグラフィックオーガナイザーをあらためて見ると，プランニングがほとんどできていなかった。プランニングの指導・練習が不十分だったため，ライティングテストで手が止まってしまった生徒が多くいたのだと考えられる。

教師の変化

生徒の課題や目標設定を明確にすることで，何を目的にどのような指導・活動をすればよいか，具体的に考えられるようになった。生徒にも活動の目標と目的を提示し，理解させることが，生徒の学習意欲の向上につながると実感することができた。英語表現Ⅱの授業だけではなく，現在担当しているコミュニケーション英語Ⅲの授業においても，授業改善の手法を応用することができた

今後の課題（次の改善点など）

ディベート活動を行うことにより，生徒が説得力のある英文を書けるようになることを期待したが，わずか 2 回のディベート活動では不十分であった。また，ディベートの指導において，説得力を高めるための根拠の示しかた，例の挙げかた，引用のしかたなどの指導が不十分であったことも改善目標に届かなかった大きな理由であると考える。初歩的なことではあるが，生徒に指導すべきことを事前にしっかりと整理して授業に臨むことの重要性を実感した。ディベート活動の取組状況をあらためて振り返ると，英語を話すことに抵抗がある生徒が多く見られ，高校入学時から段階的に，CAN-DO リストを意識したスピーキング活動を行う重要性を再確認することができた。リーディング指導においても，教科書の内容理解だけにとどまらず，そのトピックについて論理的に考えさせるような質問を教師が投げかけ，「生徒に考えさせる」活動を多く取り入れることの重要性も痛感した。

まとめ・感想

授業改善プロジェクトを通して，生徒の課題を把握したうえで授業計画を立てる必要性を学んだ。授業の最初に，授業の目標と目的を生徒に提示し，ディベート活動とライティング活動を組み合わせる旨を伝えたところ，生徒が真剣な眼差しで話を聞いてくれたことが印象的だった。今回，入試を一番意識している 3 年生と，このプロジェクトに臨むことができて，お互いに有意義な時間を共有することができたと考えている。英語教師として，この研修で学んだことを“独り占め”するのではなく，ともに働く他の教師たちと共有することが，研修に参加した本当の意義になると思う。

授業改善にあたって参考にした資料等

GTEC for STUDENTS 練習問題
https://manabi.benesse.ne.jp/assess/gtec_fs/dl/rensyuumondai.pdf（2017 年 2 月 8 日）
加藤　心(編著).(2015).『教室に魔法をかける！英語ディベートの指導法』学芸みらい社

平成 28 年度　英語教育アドヴァンスト研修　担当講師（50 音順）

江原　美明（えはら　よしあき）

グエン，トアー（NGUYEN, Thoa）

パリセ，ピーター（PARISE, Peter）

村越　亮治（むらこし　りょうじ）

平成 28 年度 英語教育アドヴァンスト研修
授業改善プロジェクト 報告書
－アクション・リサーチによる高等学校英語授業の実践－

発行日　平成 29 年 3 月 31 日
編　集　神奈川県立国際言語文化アカデミア
（担当）村越 亮治　江原 美明
発　行　神奈川県立国際言語文化アカデミア
横浜市栄区小菅ケ谷 1 丁目 2－1
℡ 045(896)1091